
BAD WORK

ヤシマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A D W O R K

【Nコード】

N 5 3 2 8 I

【作者名】

ヤシマ

【あらすじ】

見捨てられた島で下請屋として生きる詩^{しのえ}焉
いつものように依頼を受け、依頼主のところへ向かうと生活を揺るがす事件に巻き込まれる。
生き抜くために下した決断とは？

プロローグ

あの島へ連れて行ってくれ？

あんたこんなところに何のようだ。物珍しさで来た観光なら行かない方がいいぞ。

なぜかって？そんなもの知らないのにあそこへ行くのか？それは、あそこが見捨てられた街だからだよ。あの街には力は力で抑える秩序しかないんだ。そんなところが、いいところだと思うか？政府自体があきらめたところだ。国の中に合って国のものでない、さびしいところだよ。

それでも1度見ておきたい？入るのは簡単だ金を払えばいい、出るのも簡単だ、金を払えばいい。街の漁師に金でも渡せば簡単に帰らせてくれるよ、ちよつと高いけどね。ああ、あと生きていければの話だ。待っていてくれないのかって？あんなところには命がいくらあつたつて長居はするもんじゃない。大丈夫だ？なら、行ってみればいいさ。送って行ってやるよ。橋から入ると必然的に危険な東側になってしまふんだ。だから、ちよつと遠回りの西側だ。東側は、治安が悪いんだよ。あと、護身の道具とかは持ったか？代えの財布をちゃんと隠し持つてるか？

持つてない？なら、もう一度言うけどやめておけ。前の奴は彼女と一緒にひと夏の思い出みに丸腰で無謀にも踏み込んだが、いやあゝアレは見ものだったよ。上がったらずに囲まれてな、調子に乗って彼女にいいところ見せようと抵抗したら囲まれて何も出来ない内にあっけなく死んじやったよ。最速タイムで俺の中の記録を更新してくれたさ。まあお前は抵抗しなければ持つてるもの全部で助かるだろうさ。そして、その彼女と同じようにその町のやつらの仲間入りだ。彼女がどうなったって？そんな事知らないさ。でも、大体は予想つくだろう。ああ今考えたことにもう少し口付けといった感じのことが起きてるだろうよ。

これでも行くか？んゝそうか残念だ。つまそれが正しいよ。しかし、せつかく小遣いが手に入ると思ったんだけどな。まあ夏休みの思い出なら、ほかのところで作ることをお勧めするよ。沖縄の海とか、そついう綺麗なところに行く方がいいよ。向こうにいるの君の彼女でしょ？彼女のためにも普通のところに行けばいいよ。

70年前の出来事と、30年前の災害によりこの島は孤立した。

「日常から非日常へ」

I am powerless and grieve for
ignorance, and surrender before
power (無力、無知を嘆き悲しみ、力の前に屈服せよ。)
「はあ・・・うーあ？」

Anyway, I work it out, and deal
with a thing. (とにかく、死ねてことだ。)

街の隅のそのまた隅のような場所、そこは当然日が当たらなくてじめじめしていて、ビルからの騒音によりとても騒がしい場所だった。

そんな人の寄り付かない場所に、薄い黒いコートで身を包み、長い黒髪を肩のところで、軽く縛ってる背の高い細身の整った顔を持ち、年齢は、17、8くらいであろう少年が、自分の体の倍はありそうな20代後半のスーツ姿の男を壁に押し付けていた。

そして、少年の手には、相手を脅すように小さな銃が握られていた。

「ま、待て。助けてくれ、お、俺は、な、なにもしてない。」

「なにもしてないって、何で？そういうこと言う奴は大概なんか悪いことしてるんだよ。まったくそのまんまじゃん。」

笑みを浮かべながら、少年は男の額に銃をゆっくりとゆっくりと近づけた。

「本当だ。本当なんだ。」

「まあそれ以前に、決めセリフいったんだからさ、黙ってやられてくれればいいんだよ。そうしなきゃ俺がかっこ悪いでしょうが。」

安全装置をはずして銃口を男のすこし手前に持ってきた。

「悪かった。悪かったから、た、頼む何でも言うこと聞く、頼むから助けてくれ。や、雇われたんだろ？い、いく、いくらだ？倍はだすぞ。いや、もっとだ。いくらでもだしていい。」

少年は、銃の握られていないもう片方の手を軽く握りスーツ姿の男を軽く殴った。

「はい。あなたのお金と取引先の信用じゃあ重みが違うんだよ。考えてみる俺らみたいな奴等の資本はなんだ？この身体なんだよ。実力 信用 安心 確実性 処理速度 絶対服従 他多数。これが俺らの資本だ。俺みたいな小物には、実力が無いからせめて信用とかで稼ぐしかないんだよ。」

少年が、少し離れて銃を構えた。

「あ・ ・ ・ あ・ ・ ・ あああああああああああああああああ
ああああああああああ！」

正直無駄だが、男が必死に太い腕で銃弾から身を守ろうとしていた。

「……決めセリフも無いんだよね。」

「^?」

その間の抜けたセリフにつられて男は一瞬気を抜いてしまった。それを少年は逃さずに、相手の額に銃弾を打ち込んだ。

男の額には、血が流れていた。いや、少しかだけ血がたれていた。

「俺の仕事はね、あんたを生きたまま連れて行くことだよ。もう聞いてないだろうけど。それにしても、汚い。本当に汚い。」

男の座っているコンクリートには小さな水溜りができていた。

少年は懷から携帯を出して、片手で携帯を操作しながら空いた手に握っている麻醉銃を眺めていた。

（依頼主からの麻酔銃か。ありがたいな。．．．それにしても誰なんだかなコイツは？）

「あー運び屋さんですか？先日連絡を入れてたものなんですが．．．はい．．．はい。場所は前のとうりです．．．はい。ではよろしくお願いします。入金は済ましておいありますので、後はよろしくお願いします。」

もう一度男の方をみた。

まあ下請け屋みたいな下っ端の俺には情報は入ってこないのが当然

か。まあいいさ。

さっきの依頼の報酬を受け取ったはいいが、今月生き抜けるか分からない。

「今月も厳しいってのに、こんな金額じゃあやってけないだろう。いつそさっきの奴を逃がしておけば……。って、いやいや。」

錆びながらも栄えている町の通りを背丈の高い細身の少年が歩いていた。時間は朝の8時過ぎここが普通の街なら少年の年齢からして普通なら学校へ通学してるだろう。しかし少年は制服を着ずに黒いコートを身に着けているし、この街は普通ではない。学校はあるけれども。

教科書やノート、参考書が入っている学校指定のバックは持たず、何が入っているか分からないバックを肩からかけている。

「そろそろ本当にやばいな。食費がこれ以上切り詰められないなんて……。うそ!？」

歩きながら独り言をぶつぶつとつぶやきながら歩いている少年は通り過ぎる人たちに少しだけ不思議な印象を残していく。しかしそんなものはすぐに忘れ去られていった。それが当たり前の日常だから。

しかし、本当にまずいな、仕事の無い日とかはあまり食べずにいられそうだが、限界が2日に一食だ。しかも連続はできないから、今月はあるえないことになりそうだ。

とにかくまずいな、このままでは一向にエンゲル指数が下がらない。やっぱり仕事を選ぶ立場所じゃ無いってことを再自覚しなければならぬか。

背に腹は替えられない……。か。仕方ない、仕事もらいにいくか。

そう決めると少年は今まで歩いてきた広く明るい道を曲がり細く暗

い道へ、なれた感じで入っていった。

歩き続ける事およそ20分、複雑に入り組んだ道の先には一軒の店があった。雰囲気は場所からして知る人ぞ知る隠れ家って感じである。

その店を見ると少年は立ち止まり店を一通り見渡した。

「雰囲気はいいし、場所もいいのになあ」

そう評した少年の目には何故か不満が含まれていた。

なんで名前が「ぱぶっパー」なんだよ。それが、それだけがこの喫茶店兼俺たち向きの仕事案内所の唯一の欠点だった。

いずらいし、どうしようもないんだよなあ。それにダサイ。

しぶしぶと少年はドアのぶに手をかけた。

「いらつしゃあゝい。」

表面上若くとても可愛らしい声が、入り口付近のカウンターから耳に届いた。ウイリシア・三月だ。いや声だけでなくその声の主の容姿もとても魅力的である。髪は肩の辺りから軽く三つ編みになっていている金色のツヤのある髪、黒い瞳は飲み込まれそうなるほど美しいし、掛けているメガネも本当によく似合っていた。テーブルから出る腕は細く白く触ったら崩れてしまいそうだ。しかし、もう一度いうが表面上だ。

「あれ？詩焉？^{しのえ}ここに来るなんて、久しぶりだね。」

何最高の笑顔で言ってますか？仕事紹介した変わりにこっぴどく私を使うのはドコの誰ですか？本当に人を雑巾のように使って・・・ああ思い出すのはやめよう。

「ああ・・・ひ、久しぶり・・・。」

居るって分かっていたのに、不覚にもビックリしていて声がまともに出なかった。

「いやだなあ。私たちの仲なんだから、そんなに堅くならなくてもいいのに。でも、私を敬いたいというのなら別にいいよ。」

つい2、3週間前は仕事の紹介料といって都合のいい駒としてさんざん使われたばかりなのに。でも、いつも仕事を紹介してくれる

し、本当に困った時は面倒を見てくれる。

「あ・・・いや・・・その・・・前は、どうも世話になりましたな」と思ってた。」

俺は精一杯頑張ってた声を振り絞った。

「んーいいよ、仕事でしょ？今の感じだと何でもいいのかな。うん、それなら腐るほどあるって言うか腐ってる。」

ここに営業時間前から来る理由なんて仕事の紹介しかないが、自分の経歴とかどういう理由でここに来たのか知られているのは辛い。いつになったらまともに自立できるんだろう。今日は良く考えさせられる。

「もしも希望を聞いてくれるのなら低リスクでハイリターンな仕事をください。」

むつとした目を向けながらも、適当に選んだ資料を渡してくれた。

「今回はえらく消極的なんだね。前回なんてもつと裏の世界みたいな仕事って駄々こねてたのに。どれくらい困ってるの？」

俺だって未熟な時がある。そう心に言い聞かせてその言葉に耐えた。悔しいわけじゃないよ。自分が情けないだけ。

「ちよつと・・・」

「ちよつとじゃない。だいぶ生活に苦しんでいる。そうでしょ？」

「わかつてるなら言わせるなよ。・・・じゃあこの仕事で」

そう言って俺はひとつの資料を選び出した。

「はいはい。あら、本当に普通な仕事を選んだわね。まあ本当に困っているようだから別にいいか。しなれたら困るし、この仕事なら報酬も少ないわけじゃないし。えつとビルの地下駐車場の掃除ね。」

少しまって、今連絡取るから。」

そう言って少女は奥へ行ってしまった。

聞こえていたのか、それとも聞こえていなかったのか分からないが、俺はいちとお礼は言っというた。

「ありがとー。」

これを言わないと言ったのでは天と地の差があるのだ。聞こえてい

るかは定かではないが。

そういえば改めて辺りを見回すと誰もいない事に気づいた。そういえば、パブとしてはまだ開店時間じゃないのか。・・・いらっしやい、って来ること分かってたのか。まあいいか、やることもやったしアイツが準備終わるまで少し寝てるかな。そう思ってた店のソファーに横になった。身体にたまった疲れを逃がすには文句なしの寝心地だ。今寝ると営業に支障が出るかもしれないが、おきてからはアイツに散々怒られるだけだ。なら今は少しでも寝よう。

思考を放棄し、意識を深い闇に沈めた。三月にたたき起こされて、寝ぼけを覚ます間もなく大井製薬の地下駐車場へ向かった。

大井製薬、ここ最近有名になってきた会社だ。確かサプリメント事業で大成功を収めたらしい。

まあちよつと高めな値段なんで、エンゲル指数が100に近い俺にはまったく手が届かないものだ。

「広いなあ・・・えつと作業員の事務所は・・・ああそこか。」

広い駐車場の、太い柱にある地図をみて場所を確認した。にしても、どれだけひろいんだ。えつと事務所ってここかな？ってただの事務所が俺のすnder家並に広いつてやめてくれないかなあ。

「えつと、ウィルシアさんの紹介で清掃に来たものなんですが、責任者の方は・・・？」

軽くノックをしてドアを開けた。

「おおよくきてくれたね。今日は、従業員が私以外ほとんど休んでしまつて私含めて11人しか居なかったんだ。いやあ、本当に君一人でも助かるよ。小人数しゃこんな広いところ掃除できないからね。それと、私はここの担当者の墨奈というものだ。よろしく」

丸々と太った愛想のよさそうなおじさんが汗をこれでもかと言うようにかきながら、迎えてくれた。

まあ一人くらい加わっても大して変わらないと思うけど、いいのかな？いや、奥を見ると他にも俺のような人がいた。

「いえ、こちらも助かりました。」

たった一日の掃除で5万ははんばない。正直裏があるか思っているけどそうでもなさそうだ。

「じゃあすぐに始めたいから、作業着に着替えてきて、ああ〜あとロッカーは035を使ってくれ、そこに全部入っているから。」

辺りから見えて一つだけ飛びぬけて高いビル、「大空製薬本社」その、ビルの一部屋の中に、数人の男たちがいた。

「やっと思つたぞ。墨奈。こんなところにいたとわな。まさか、研究結果を盗んでどっかの研究所にもぐりこんでると思つたら、事務員として働いているとわな。滑稽だな。いや、それは・・・カモフラージュか？」

数人でも人がいるのに、人気をまったく感じさせないその部屋の中のスーツ姿の人たちを含め、その白衣姿の男は異様な雰囲気を感じていた。

「まあ大井製薬の成長はあいつの持ち出した研究結果のおかげだろう。しかし、頼るべき相手を間違つたな、そのせいで、お前がどこにいるか丸分かりだ。もう少し金で動かない信用できるところへいけばよかったものを。」

さーて、どうしてやろうか、墨奈。お前のせいで俺の立っているところはとても不安定なんだよ。せっかく築き上げてきた地位や威厳はもうボロボロだ。だからお前を捕まえて制裁を与えてやらんとな。

「お前ら、朝の5時までにあの野郎をここに連れて来い。それと、時間は守れよ？7時から会議で、12時まででは出てこれそうにないんだ。」

「分かりました。しかし、少々問題が」

スーツ姿の男のリーダーらしき一人が一步前へ出てきた。

「なんだ？」

「前に詮索させていたものが、何者かに捕まった・・・いや、殺されまして。正確に言うと、何者かが、部下を捕まえて、引渡しその引き渡した相手に殺されました。あと、捕まえたのはおそらく下請け屋が殺し屋だと思われます。」

下請け屋？殺し屋？そんなことするのは、そいつらしいないだろうが、まったく当たり前のことを。

「それでどうしたいんだ？」

白衣姿の男を怒らしてしまい、男の周りの空気は豹変した。

「もしものために銃器の使用を許可してほしいのですが、よろしいですか？」

「高い金払って雇った割には、そこらの下請け屋に銃まで使うのか？」

「いえ、その下請け屋が、まだ墨奈土を護衛しているか分かりませんが、墨奈土も馬鹿ではありませんので、何らかの対策を立てているでしょう。それに、私たちは、同士を失うわけにはいけないのです。」

またわけの分からないことを、同士だとか主だとか。いくら無所属だからと言っても、もう少しまともな奴等を雇えばよかった。

「まったく、お前たちを、わざわざ創始会から雇った私の身にもなつてほしいものだ。」

「誠に申し訳ありません。しかし、私たちも自分の身第一とさせていただいていますので。」

何かをあきらめたように、白衣の男は話を戻した。

「やつは今大井製薬の地下駐車場に清掃担当者と偽って働いている。幸運なことに今は清掃中で駐車場には清掃員しかいない。大体の清掃員の数はこちらから減らしておいたから、あとはお前たちに任せろ。出入り口はしっかりふさいでおけ。」

そういつて男は机に資料を置いて部屋から出て行った。残った男たちはその資料に目を通して、軽いため息をついた。

「12時30分に作戦を実行する。各自11時30分までに準備をし、駐車場に集合。」薄暗い地下を必死に走っている太った男と、それを守るように3人の男たちが銃を構えてながらその男を囲んでいた。

「どうすんだ。なあ、おっさん？出口全部ふさがれて逃げられねーぞ。」

見た目通り運動能力がないから仕方なくとまって墨奈の息が整うのを待った。

「大丈夫だ。はあ、はあ。こ、ここは、災害時の非難や物資のために広く作られ、作られていて、物資輸送のために地下に続いている一般者の立ち入り禁止通路がある。そ、そこからあいつらよりも早く出れば、間に合う。」

「なら急ぎましょう。今の現状は歩きながら話します。」別の口調が丁寧な男が話した。

「なんかわかったのか？」

墨奈を囲むようにして、また走り出した。

「出口を探りに行った7人はやつらに殺されました。それと各出口には6人いますね。今この地下駐車場の中には8人、外にはそれぞれ6人ずつです。殺り合ったら確実に不利です。」

急に今まで口を開かなかった男が止まった。

「俺はここで足止めをする。」

「ふっざけんじゃね。このままトンスラか？おい、考える。ただでさえ3人じゃ物足んねーのにさらに少なくしてどうすんだ。」

止めているのにもかかわらず、男は違う道へ進み始めた。

「せめて10分は耐せる。」

両者のやり取りをただただ見ているしかない墨奈を見て、もう1人の男が口を開いた。

くそ、どうせこいつは逃げる気だ。今はとめているこの時間ももっ

たいない。そもそも、今集まった俺たちがいいチームワークを発揮できるはずがない。

「分かった。頼む・・・行こう。」

「つくそ、とめておけよ。」

そういつて、走り出した男たちを背に歩き出した。

「どうしてあいつを行かせた？」

「あいつは・・・」

「裏切るのは目に見えていたぞ。」

驚いたように言葉を詰まらせた。

「気づいてたか。しかし、どうしようもなかったんだ。あそこで無理にとめられればきつと撃ち合いだ。そうなたら・・・」

その後にくくあいまいな言葉を墨奈の言葉が打ち破った。

「その扉だ。ちよつとまつててくれ、いまロックを解除する。」

厚い扉がゆつくりと横に開いた。

「なあ、ここで大丈夫か？すぐに突き止められそうなんだが。」

「いちお同じような扉があと、11個あるから少しは時間が稼げる。それにこの扉は旧式だけど少しは逃げるための時間を稼いでくれるだろう。だから少し休ませてくれ。この年と体系じゃ少しつらいのだよ。」

そういつて、中へ入り閉まった扉へと寄りかかって座り込んでしまった。

「なあおっさん。追われてる理由とかそろそろ教えてくれてもいいんじゃない？」

「ああ・・・それは、私が大空製薬の研究データを盗んできたからだよ。」

「うわあゝ。俺らおもいつきり悪者じゃん。」

そういつて、銃を構えていたもう独りの男も地面にへたり込んだ。

「いやいや、そういう訳じゃない。私の研究データと言つても差し支えがない様なものなんだ。それが幾度もなく利根とね隆史たかふみという男に勝手に使われて、悪用されていたことを知って持ち出してきたん

だ。それでここの社長とは昔学会で知り合ったんで頼ったんだが、金につられて私の事を話してしまっただけだな。」

「どのようなことにあなたの研究結果は悪用されていたんですか？」

ついにもう独りの男も座って墨奈の話を聞いていた。

「私の研究は、人間の体の限界を超えるについて調べていたんだ。例えば、ドイツの学者が人間の寿命が300歳まで延びるといったことがあってそのことについてや、脳は感覚器官から得た情報元に何らかの物質をを分泌するんだが、その分泌された成分の量を増やしたり分泌される物の種類を増やしたり、その量に耐えることの出来る体を作っていた。ほかに色々あるが、やつは今言った二つの研究データを30年もの間、見事に悪用してくれたよ。寿命は細胞の再生力の強化、それと目や耳から得た情報からドーピングの類の物質を分泌させたりと、まるで生物兵器を作ろうとしていたよ。」

墨奈がとても分かりやすく話したおかげで、二人が困ることはなかった。墨奈の長所は、難しいことを簡単に分かりやすく教えることだ。と言っても、この話では長所を活かすようなところではなかっただろう。

「そりゃあ〜金になるだろうな。」

この話のより簡単なより本質的なところをついてきた。

「ああ、この類の研究は成功すれば金になるからね。まあ金を気にする科学者は、科学者とは呼べないだよ。科学者は金を気にせず、自分の興味の対象を追い求めるものだからさ。」

「けど、金がないと何も始まらないぜ。」

「追われている理由にも納得がいったことですし、そろそろ行きましようか。」

「ああ、私も十分休めたよ。ありがとう。」

そういつて奥の壁にある、パネルを操作した。

「な!?!どうして動かない?ここの電力とシステムは独立しているはずだ。止められるはずがない。」

「どうしたおっさん？」

「なんてことだ、閉じ込められたようだ。」広い地下駐車場にブラシがする音が響きわたる中、一人ぼつんと立って延々と掃除をしていた。

「いくらなんでも広すぎるだろう。」

少し大きな声で愚痴を言っても返ってくるのは、虚しくも自分の声だった。大体縦100横70くらいの広さを朝までやるのだから、相当疲れるであるが、その分のものはもらえるのでがんばれるのだ。

「でも、人いなさすぎだ。」

俺はそう言っ、いったんブラシをとめた。いつ見ても広い。どうしてこんなに広いのか分からない。

このビルは確かに大きい、ビルの大きさ、社員の数にしても、この地下駐車場は広がった。

「まあいいか。」

そう言っ俺は再び壁に向かってブラシをかけた。床や壁がある程度綺麗になるとペンキを塗りなおしてまたブラシをかける。その繰り返しだった。でも、いやじゃなかった。どこかの誰かも知らない人を脅して、時には暴力を振るって捕まえるよりよっぽどいい。・・・下請け屋最低の考えだ。こんな考えのまま進んだらきつとそのうち殺されるな。

「ふううはああ。」

深くゆつくりと深呼吸をして気を取り直した。

それから、40分後くらいだろう、俺が掃除している区画の入り口からエンジン音が聞こえてきた。

理由を知らない社員であろうか。清掃中は誰も入れてはいけないので、仕方ないので俺はその車の方へ何も気に留めず向かった。

「あの、申し訳ございませんが、ただいま清掃中なので、午前7時過ぎまでお入りいただくことができません。その、誠に申し訳ございません。」

愛想笑いをしながら、俺はペコペコ頭を下げ続けた。当たり前のことに対して、何事も頭を下げればうまく行く。……。それが、俺がうまく生きていくために学んだことのひとつだ。かつこ悪いとかそういうことはこの島じゃ考えない方が良い。

「どうしても入れないか？」

「本当にすいません。」

男が車から降りて話しかけてきた。一瞬だが、社内には運転手のこいつを抜いて6人の場違いな大人たちがいた。

なぜだと、一瞬、一瞬だけ。考えた。しかし、答えに行き着く前に俺の耳が何かに反応した。

「仕方がないな。」

そう、聞こえたはずだ。それが聞こえた後すぐに、一瞬視界を何かが横切った。何も、何も反応できないまま俺は「何か」で殴られたことを察したが、それが何でどうして殴られたのか、考える前に倒れてしまった。

痛かった。痛すぎた。とんでもなく痛かった。だから運良く意識を保てたんだろう。もし、気を失っていれば、あいつらにつれてかれて、どっかに売られて中身抜かれるだろう。なんて恐ろしい。やってられない。でも、俺は生きたいから、生きなきゃいけない。だから、思いつきり逃げた。

でも、今逃げられているのは、奇跡だろう。いや、どっちかっていうと殺せる確信があるから今はほっとかされているんだろう。ほかの出入り口はたぶんふさがれているな。と、なると……。今は逃げて安全なところに行こう。……。そんなところあるのか？

「隊長、あいつはどうしますか？」

澄んだ声^{れいか}が車内に響いた。

「怜火、銃をおろせ。今は時間がないダーゲットを最優先で作戦を

実行する。できるかぎり殺しはするな。」

車から降りて詩焉を銃のグリップで殴った男は、車に再び乗って、適当なところに停めた。

それにしても、それなりに強く殴ったはずなのに、気を失わないということは、かなりの実力か。一瞬で判断して威力を落としたのなら、少し厄介だな。しかし、反撃もせずに逃げたということは、やはり一般人の可能性のほうが高いと見るべきなのか。

「それでは、作戦を開始する。各自通常回線は常にかいて。行動に関して、広さと相手戦力の予想を入れて二人一組で行動。怜火は単独行動だ。」

「なんで私だけ一人なんですか？」

「お前は、攻撃が見境ないんだ。仲間まで殺されたら元も子もないだろ。」

「だってさ。さびしければ、俺に連絡しな、いつでも回線開いてあるから。」

黒い防護服を来た若い男が、肩に手をおいた。

「行動は、各自の判断に任せる。誤ってターゲットの射殺をしないように。」

そういつて、各グループが走り去った。

「待ってるぜ。」

一人残ってしまった。過去にペア組んだ人を対象を撃つために怪我をさせてしまったことはある。

けど、それは仕方がないことなのだ。

三組が行かなかった方向は・・・あっちか。

広い駐車場を、2人の武装した殺し屋が走っていた。

「ウイン隊長、やはり怜火はこの場に似つかわしくありません。」

武装して走っているのにもかかわらず息ひとつ乱さない男の口から

はつきりと言葉が発せられた。

「確かにあの態度は少々問題だが、ノルン様の願いのためには必要な力だ。それに、あいつの意思は我々の意思と同じものだ。」

きつぱりと断言され、隊長と呼ばれている男ほどではないが、ほとんど息を乱していない男の息が乱れた。

いや、息を乱して怒鳴った。

「しかし、怜火を連れ続ける意味はないはずです。」

「我々としたことが、少々おしゃべりをしすぎたようだ。不覚だな。できたら隠密に事を運びたかったのだから。」

そう言つと、走るのをやめて、拳銃、アサルトライフルを構えて柱の影に隠れた。

「すいません。隊長、感情的になりました。」

「誤るな、宮田。私にも責任はある。それより、援護頼むぞ。」

そう言つて、サブマシンガンが無謀にも片手でひとつずつもつ馬鹿でかい2丁拳銃男に、向かつていった。

「あんたら、大空製薬に雇われたのか？」

男は片方の銃を肩に下げなおし、柱の物陰から荒々しく打ち続けた。

「だんまりか。残念だな、死ぬ前に何か言つといた方がいいと思つたによお。」

だんだんと二人の距離が近づいてきた。それはどちらかの命の長さを表したものであった。

そして、互いの距離がちょうど柱一本一本の間の距離に狭まった時勝負が決まった。

先にサブマシンガンを持った男が仕掛けた、しかし、振り出した瞬間、足元の地面が砕けた。

「な！」

その一瞬が、すべてを決めた。ひるんだ一瞬を見逃さず相手の肩に9mm弾が打ち込まれた。

「っが！」

たった9mmの弾丸が体を貫いただけで人は吹っ飛ぶのであった。

たとえどんなに鍛えていたとしても。なんて情けない。そして、富田がアサルトライフルをしまい、もう片方の無事な方の肩に銃弾を打ち込み確実に動きを止めてから、右肩を踏み、腕を押さえて額に銃口を押し付けた。

「殺し屋か？下請け屋か？まあどちらでもいい。俺たちに歯向かったことを後悔しろ、そして出会ったことに嘆くんだな。最後に一言あるか？」

「ぐうつ・・・・はああ。はああ。一緒・・・・にい・・・・一緒にいいいい。」

パン。あつけない音が響いた。人の命を散らすには本当にあつけない音が響いた。

「気を付ける。宮田。援護はよかったが、最後まで気を許さない方がいいと思うぞ。」

左腕を軽く蹴ると、ピンが外れていない手榴弾が転がった。

「すいません。」

そういつて、その手榴弾を回収した。

「しかし、この程度の腕前のやつらをそろえても意味がないと思いますがね。」

「いや、この程度のやつらでも3人にでもなれば十分厄介だ。しかし、掃除もしながらの護衛なら意味がないだろうがな。清掃員を減らされた時点でやつのは負けは決まっていたようなものだ。」

そういつて、男の居場所を外で待つ運び屋に連絡して、死体の始末を終え、進んでいったのだ。

そろそろほかのところでも戦いが始まるな。まったく、できるだけ被害は避けたいというのにな。襲われてから数分後、奴らが殺しを楽しむバカじゃないことに少々感謝しながら、事務所に向かった。

それにしても、やたらとドンパチしてるのはなんでだろうか、何が目的なんだろうか、分からないことだからだけだ。と、また余分なことを考えて余分なことに首を突っ込もうとしていた。

わけの分からないまま進んでいると、事務所が見えてきた。すぐさま着替えをして、心もとない麻醉銃を構え、腰に特殊警棒を差して、心の準備は整った。正直バツクの中身はできるだけ使いたくなかった。手榴弾とスタングレネードとフラッシュグレネードその他少々どれも、俺の安月給じゃ高価なものだ。

「悪いね、皆さん。俺は金より命の方がめっちゃ大切なんでね。コレにて失礼させてもらいます。そもそも掃除のバイトなんでこの件関係ないと思いますから。」

そう言つて、事務所のドアの手を掛けて外に出ると、そこには肩に見たことのない花の模様をつけた少女が一人ぽつんと立っていて、偶然にも目が合ってしまった。こんな緊急時に何を考えているのか分からないが、不覚にも、かわいいと思った。長い黒髪に、少し青い瞳、整った顔立ち、スラットしたラインとかすべてが美しかった。そして、いかにも特別な存在というような雰囲気を出していた。けれども何かが引つかかっていた。俺はこの感じを知っている。三月だ。不覚にも外面は美しいと思ってしまうが、内面はとてつもなく危険という薔薇のという比喻表現がピッタリ雰囲気の女の子だ。それを証明するかのように容赦なく、肩に掛けていたアサルトライフルを撃ってきた。

「何ですとお!？」

アサルトライフル対麻醉銃、言うまでもなく、俺はすぐ近くの柱の影に飛び込んだ。

「殺し屋?それとも一般人?関係ないか、とにかく死ねばいい。」狂喜したように彼女は叫び、そして美しく、まるで舞うように俺の撃った麻醉弾をかわしながら、彼女は走ってきた。

一瞬だけ、銃撃がやんだと思うと、カッンという音と共に俺の隣に手榴弾が転がってきた。蹴る前に爆発することを恐れて、蹴ることもできず、俺は近くにあったもう一本の柱に飛び込んだ。

運良く柱の裏側で爆発をした。小さい手榴弾は爆発で人を殺すのではなく、爆風に乗せて破片を飛ばし、その破片で人の命を奪うのだ。

「死んでください。」

やばいな、絶体絶命だ。たぶん思い切って踏み出して麻酔銃撃つても効果が聞くまでに俺は撃たれて死んでしまっただろう。実際当然なと思うけど。

ならば、ここは金より命。スタングレネードとその他の3連発でもくらくつけい。

「さらば、仕事3回分。」

そう叫んで、3つのピンを抜いて、あいつに向けて放り投げた。

「甘いです。」

そういつて、ライフルを放しあいた手で、3つのうち2つの手榴弾を手に取り飛ばし、爆発の被害を避け、最後にスタングレネードを打ち抜き不発に終わらせて、近づいてきた。

「本当にごめんなさい。死んでくださ・・・い？」

柱の影に回ったが、残念ながら俺の姿はなかった。一瞬のどさくさにまぎれて柱の死角から後ろに回り、目と耳をふさいだ。

目と耳を塞いでも、目もちかかしするし、耳もグワングワアンする。

あの光を人の瞼で塞ぐのには、薄すぎた。

「柱太くて助かった。」

柱のすぐそばに、さっきの少女が倒れていた。どうにか気を失ってくれたみたいだが、念には念を入れて俺は、首に麻酔銃を打ち込んだ。

3つ投げる前に柱に2つ目のスタングレネードを固定してピンにワイヤー巻いて、あの子の銃が俺に向けるギリギリのタイミングで俺は柱の裏へ飛び込んで、ワイヤーを引いてピンを抜いた。

なんというか奇跡的な劇的勝利だ。

「さてと、これからどうしようかな。」

だが、少年はその場にただ立ち尽くすだけだった。

「いくら高額の護衛依頼だからってこの戦力差は酷いんで、俺は逃がしてもらいますよ。流石に全員助け出すことなんて無理だ。」

ぼさぼさの髪に、あごひげを生やし、この場に似合わない真っ白いYシャツを着て、戦場に立っていた。否、戦場であつた場所に立っていた。足元には、無数に近い銃弾や人が転がり倒れ、血が流れていた。

そして、戦場の厳しさを物語るかのように、白いYシャツには赤い水玉模様ができていた。

「まったく、こいつ等の部下先に捕まえといて良かったよ。創始会の曲がり物だまったく。主となる彼女の変わりに間違つた力を振るうバカどもか。まったく、主人の面汚して楽しいのかね。」

そう言つて、ポケットから慣れた手つきで片手でタバコを出して口に加えた。が、しかし、火はつけない。

「禁煙中でミントパイプつてもものしまらないねえ。」

封鎖された地下駐車場から暗い町の中へと静かに歩いていったのであつた。静けさに満たされた地下駐車場には一人の男が圧倒的な強さで敵を葬っていた。

動けば殺されてしまう。そんな緊張感の中で残り5人となつた兵士たちは極限の状況に立ち入っていた。決して油断をしていたわけでもないのにさっきまで狩っていた獲物に今は狩られている。

その男の得物が対物ライフルと言う理由もあり火力の差が少しは戦力に影響しているが、このような戦闘の場合勝利条件となるのは火力ではなく人の数だ。それでも、この戦力の差は埋まらなかった。

「あんたら逃げるなら今のうちだ。」

圧倒的な位置にたつた男が勝利を確信していた。

まったく、あいつらは俺が裏切るとか言つてたり思つてたりして酷いな。まったく。どうせ向こう側に行つても殺されそうだしな。

それなら戦った方がまだましだろうに。

「つつ！」

油断しているうちに回り込まれたか、まったく。余分なことは考えるものじゃないな。まったく、こっちの残り弾も残り少ないつてのに、そろそろこっちに変えるか。対物ライフルを地面に置き、腰からハンドガンを引き抜いた。

「おおおおお、死ねええ」

ふっざけんな。特攻とかやめやがれ。

数発の銃声になり、男がそり倒れた。

くそ、こっちからもか！お前等命を大切にしろよ。

つて殺す側が何言っただかな。

「ぐああああ」

そしてまた、男が倒れた。

残りは何処に？そうあたりを見回していると左肩に激痛が走った。打った奴が起き上がりナイフを刺してきやがった。

再び奴がナイフを構えてこっちに来ると相手の四肢に何発も打ち込んだが、勢いは止まらなかった。

「防弾繊維・・・防弾チョッキか。なら顔を・・・打つまで。」

カッン。軽い音がマズルから鳴った。ジャムだ！。これだから安物はああ。ちつくしよう。

「くっそお。」

すぐにハンドガンを捨て肩の対物ライフルを撃った。

「ギリギリの距離だ。」

ライフルのその長い銃身を、男の胸に当てて引き金を引いた。それでもまだ、弾丸が突き抜けてはいなかった。とんでもない性能だ。しかし、死傷だ。死ぬことがきまった奴の相手なんかしてられない。残りは4人だ。撃った2人のうち一人は防弾繊維のなにかを着ていて、その一人はここでもう一人は向こうで倒れててあとは向こうの3人だな。

「た・・・ちょう・・・隊長。すい・・・ません。」

さつきまで援護していたほうから声がした。

「真田！」

今コイツはなにをした？

「え？」

そしてその人は巨大なハンマーに殴られたかのように、圧倒的な地位を保っていた人はただバラバラの肉塊となった。

「こ・・・つちから・・・こつちから。」

そう言つて真田は、墨奈たちのいるドアの前に向かった。

「さん？・・・真田さん？・・・真田さん？・・・真田さんですよ？そんな・・・うあ・・・ああああ。」

「ヴあああをおおおおああああ。」

理性の形もないような叫び声をあげた。

「あああ・・・うああああつあああ。」

「あああ・・・。」

再びおもいつきり腕を振つて殴つただけなのに人の顔は肉塊となつて飛び散つた。

「真田・・・つく。富田、柳、真田を止めるぞ。」

二人がそれぞれ左右に分かれて参方から囲んだ瞬間、真田だった物は急に倒れた。

「いったいどうしたんだ？」

「さー分かりませんねー。でも、コレ使つたんでしょね。」

そういつて転がった薬のビンを投げてよこした。

「・・・この薬は確か試験段階だったな。しかし、なんなんだこの効果は？」

利根の言つてた副作用がこれか？いくらなんでもコレはひどすぎるだろ。

「隊長、それよりここに奴等がいるといつてましたが、確認してみましようか？」

そうして、墨奈たちのいる扉へと手がかけられる。

「非日常進入中」

この島に名前はない。だから、この島の固有名詞こそが代名詞の島や街である。面積は約55k?でおおよそ東京都2つ分。人口は・・・分らない。毎日いろんな人が入ってきて、そして出て行く。主に話されている語源は、日本語と英語とかたごとの日本語とかたごとの英語である。生活の基本ラインは近くの国に害を与えないという理由で供給されている。だからガス代や水道代はほとんど無料に等しい。電力は風力発電や波力発電や太陽発電さらに地熱発電と、この島の自然や環境をフルに使って、島の住民が生活するのには十分すぎるほどの発電をしている。そして、その電気を売ってこの島は成り立っている。しかし、この島は他の国とは関わることが出来ない。正統な商売が出来ないこの島にとっては、電気を横流しするのが数少ない商いの方法なのだ。基本行っている密輸も発電も管理しているのは島の幹部たちなのだが、どうなっているかは、詳しくは分からない。まあ、島が成り立っているってことは、ちゃんとやれているんだろう。

結局は物理的にも隔離されているこの島は、国の一部でありながら無法地帯となつて、あきらめられてている。だから自由にやれるが、その分どこからも支援がなく潰れえしまえばそのままである。・・・こんな無法地帯が潰れることはないだろうけど。

大体今のこの島はこんな感じである。あと、この島の勢力は東、北、西と3つに分けられている。

南は島の発電施設なので、共有の場所となっている。そして、それぞれの区別、見分けるためとして、東の関係者は薔薇の花の模様、北の関係者は百合の花の模様、西の関係者は桜の花の模様をつけ、それぞれを区別している。

もう一人の重さを感じながら、島の西地区をスクーターが疾走した。
・・・ごめん胸張った。そんなに速く走ってない。

こんな深夜なのにまだ人がまれにいるが、治安が悪い東地区に比べたら大分ましな方だ。

現在この島は、治安維持団体と呼ばれている、暴力団体、マフィアなどが仕切る組織に管理されている。詳しくはボス的な人はまだに表舞台に顔を出したことがないから分らない。それに、関係者以外に見たたことがない。けれど、そういう関係の人には絶対に会わないほうがいいに決まっている。仕事柄会いそうでイヤだけど、けど、まだまだ管理が甘いのが良く分かる。走りながらも少し路地を見てみると数人が喧嘩をしているし、家のない子供がこの時間帯を歩き回っていたりする。結局最後にたどり着く答えはいつもと変わらずこの島がとんでもなく、ろくでもないということだった。そんな事に想いふけていたら心の中で微妙な位置にあるウィルシアの店に付いた。スクーターはもちろん気にせずに店の前に堂々と止めた。まあ時間帯が時間帯だから客も居ないから、怒らないと思うしね。

「いらつしやい。そして色々のご苦勞様。適当に座つていてね。」
カウンターの奥からいつものように猫をかぶったような声が聞こえてきた。

「あーそれがさー。ちよつと困つたことに・・・」

「はあー？」

奥からサンドウィッチを持ってウィルシアが出てきた。

「なに？誰か殺したとか？それとも・・・」

手に持っていたサンドウィッチの皿をカウンターにおいて大体3歩弱の距離を一瞬でつめてパンチが華麗な弧を描いて鳩尾に入った。幸いさっきの少女はソファアーに座らせて置いたので一人だけ吹っ飛んだ。

「その子がどうしたって？ どうしちゃったのかな？ 私の情報だと、あの駐車場からはあんたの死体はなかったってのは確認してるけど、まさかその子になにかしてたの？」

転がった俺は、目が回りながらも必死に答えた。それと彼女が会得しているものは居合いの要領で相手の懐に飛び込む技とそれに合わせたパンチだけだ。まあそんなに鍛えてないのが運が良くあまり痛くなかった。

「何もしてない。その子は駐車場襲った奴等の仲間で顔知られたから仕方なくつれてきたんだよ。殺すわけにはいかないだろ。」

「あらそう。悪かったわね。ならその子が起きるまで、ゆっくりしてていいわよ。」

そう言つて差し出されたサンドウィッチとコーヒーを口に入れた。なんというか・・・アメとムチだ。黒いヴァンが静まり返った夜の道路を疾走する、その30分前。

「なあおっさん。ドアが開きそうなんだが・・・。」

「ああ・・・どうしたのか。」

汗だくの額に手を当ててガックリと太った中年男性は膝をゆっくりと付いた。

ドアがゆっくりと開く間、それぞれの緊張は最大限に達していた。逃げられない恐怖、追い詰められて何も出来ない自分たちの無力さに、絶望し戦う意味すら持てなくなった。

「ここまで来たら旅は道連れです。あわよくば生きて出・・・。」

完全に開ききつていないドアから一発の銃弾が打ち出された。

「ああ・・・ああ・・・あああうああうあああ」

「ま、待て君。もう投降したほうが・・・」

人の命が爆ぜるには軽すぎる音が再び響いて、そこには2つの命が散った。

「投降だと？笑わせるな。お前達みたいな奴等をわざわざ生かす理由なんて無い。」

扉の向こうから、悪意や憎悪などを一斉に詰め込んだ、どす黒い声が響いてきた。

「しかし、殺す理由もな・・・ぐがあ。」

ハンドガンのハンマーの部分でこめかみを殴られ床にまともな受身も取れず転んでしまった。

「口を開くな。お前も『生きて』つれて来いといわれてなければ、あいつらみたいにすぐに殺すさ。分かったか？分かったならさっさと歩け。」

後ろ手に手錠をかけられ、背中ごしに銃の感触を味わいながら、せかされて歩かされた。

あれは？まさか、私の薬を使ったのか。・・・いや、もうあいつの薬か。

しかし、それにしてもひどいな。拒絶反応・・・か。適性テストもこれじゃあしてないだろうし。体を慣らしてないな。これじゃあこうなるのが目に見えているのに。

悲しいものだ。科学者としてあいつの気持ちが分かっちゃってしまうんだからな。上っ面だけ一般人を装ってもやっぱり私の本質は科学者かある意味では、あいつの行動も正解だろうな。そう思ってしまう私が憎いよ。

肉の塊をチラチラ見ていると、それを察したように、後ろから声がした。

「あれが分かるのか？」

「話しても良いのかね？」

なにも返事が返ってこないか、怒ってるな。怖い怖い。もう殴られたくないからね、素直に話しますよ。

「あれは、筋肉を増強する薬だよ。まあ強力なドーピングだと思っ
てくれればいい。それで、強力すぎるから適正検査をしたり体を長
時間かけて慣らす必要があるんだが、きつとそれをしてなかったん
だね。だからあんなにも筋肉が盛り上がってしまったんだろう。本
当なら、細胞一つ一つが大きくなるのではなく、一つ一つが強くな
るのが本当の姿だよ。可愛そうに。……ッツ！」

今度は後頭部を殴られた。いいかげんにしてほしい。

「かわいそうだと？……そういう風に涼しい顔をしてられるのも
今だけだろうな。」

そうしてヴァンは走り出した。街のとある一角に明かりのついてい
ないいくつがある部屋のひとつ。

「……分かりました。では……はい……参ります。」

電話を置きすぐに自分の携帯電話へ手を伸ばし、ある番号へ電話を
かけた。

「ウエストか？墨奈はどうした？そうか、時間通りで素晴らしい。
しかし、残念ながら私は会議が早くなってしまったんでな、指定し
ていた場所へ……いや、12階にある会議室まで付き次第連れて
きてくれ。では、頼んだぞ。」

相手が電話を切手からも、ただ光続ける液晶画面を見続けていた。

「よろしいのですか？」

それは、呼吸と呼吸の間を抜けるように深い闇から突如と現れた。
「ああ、いちおこの研究は墨奈の論文から始まったからな。奴にも
成果を見てもらわないと、私の気がすまないんだ。それにしても楽
しみだ。何年ぶりだろうかあいつに会うのはな。それと……いく
ら長年の付き合いだからといっても、突然現れるのはやめてくれな
いか？心臓に悪いというか……なんというか。」

「失礼しました。しかしながら私の役目は利根様の秘書兼護衛であ
りますので、対象を見つげるためには姿を表さない方が見つけやす

いものなので。それと、私はいつも利根様のお側に居ますので、突然という事は無いと思うのですが・・・やはり、隠れていない方が良いですか？」

少しの間の沈黙であつたが、それはいつもよりも長くとても、長く感じられた。

「はあー、いい。これから、君の好きなようにしてくれば良いさ。君は優秀だからな。」

「ありがとうございます。」

「しかし、まだ君は薬に完全に適用したわけではない勝手に溶媒の中から出てこられては困る。」

「すいません。心配だったものですから。」

このビルの研究所には非合法的な研究を扱ったものがあり、その結果が彼と彼女である。

彼ら、いや彼女は緑の掛かった液体の中に入れられ、モルモットのように扱われる。

プライバシーなど、まるでなく本当に人ではなくモルモットのように。

そんなことを平気でして、さらに自らの肉体までも研究に捧げた男である。そんな彼に自分の全てを捧げるのが彼女である。

これがもし愛ゆえに、と言うのなら本当に歪んでいる。

しかし、そんな愛のほうがこの島にはあっているのかもしれない。

「安心しろ、私の研究はまだ外に流れていない。私を狙うものもない。」

「すいませんでした。」

そう言つてしばらくすると、また呼吸と呼吸の間を縫うように気配を消され、どこかへ行つてしまった。

研究結果もしっかりとそろえたし、もう前のようにはいかないな。上の奴等も認めざる負えないだろう。特にくたばりかけてる社長なんかのどから手が出るほど欲しいだろうに。

エレベーターでの移動中、思い返せば、この日をいくら待ち伸びたで

あろうか。いくら成功した光景を思い浮かべただろうか。いくら墨奈を憎んだであろうか、あいつが邪魔しなければこの研究は8年は速く完成していただろう。しかし、もうそんなことはどうでもいい。今日から奴と私の終わりが始めるんだから。

さあ楽しみだ。

そうして、扉は開かれた。

「みなさん。今日はわざわざお集まりいただき本当にありがとうございます。」

そして、その40分後。

会議室へ連れてこられた私はいまだに意図がつかめなかった。利根が私を殺しに人気のないところで待っていると思ったがそれは違うようだ。ではなぜ？残念ながら私の結論がまとまらないうちに扉が開かれてしまった。

広い会議部屋にはその男しか居なく、既に会議は終わっているようだった。そして、まだ朝に成りかねている景色を見ながら私に背を向けている一人の若い男が居た。なぜか、その男はどこか昔の知り合いの面影があつたが・・・気のせいだろう。そいつは私と同じで今は58歳だ。今私の目の前にいるのは後姿だけでもだいたい20代後半の若い男だ。そんなはずがないのだ。しかし、駐車場での一件、利根が絡んでいること。どうしてこんなにも納得できないのだろうか。

「覚えていたか？あれから35年ぶりだ。」

ああやはりそうか。あの薬、利根、答えはとっくに出ていたじゃない

いか。それを私が認めなかっただけか。

「久しぶりだな、利根。君はあのときから全く変わってないんだな。」

「ああやはり君は驚かないか。それにしても、君は随分丸くなったな。あと、少し薄くなってるな。」

憎むことを得忘れ、その時はただ純粹に科学者としてお互いの再開を楽しんだ。

「そういうな、だいたい人はこうなるものだ。それと、どうやら私の論文は正しかったようだ。どうだ？薬の生産の目安は立っているのか？」

「それをさっき決めていたんだ。どうやら社長自ら効果を試してからだそうだ。まったく欲深い糞爺め。長生きは自分だけがしたいそうだ。反吐が出る。まあそんなことはいい。それよりこれを見てくれ。」

そういつてつけた大画面の液晶には、いろんなグラフが事細かく記されていた。

「人をなんだと思ってるんだ。つとこれが長年装ってきた一般人の私としての意見だ。しかし、科学者の私としての意見としては、すばらしい。この一言だ。だが、私はもうやめたいんだ。だから頼む。この薬を研究結果を全て葬り去ってくれ。これは寿命が伸びる薬だけではないだろうに。高いリスクもある。なじむのに時間がかかる。そして、関係のない人を勝手に使って人体実験までしている。これは、これは、私たちが目指した科学ではないんだ。なあ頼む、これは作ってはいけなかったんだ。これからだって、どんな・・・副作用が。」

必死の説得も報われずその口から漏れてきたのは、不適な笑い声だけだった。

「言つたろ、君は丸くなつたつてな。君に選ぶ権利はない。君は認めるしかないんだ。はいと言いたまえ。」

「嫌だと言つたら？」

「犠牲者が増えるだけだ。それに君の答えなんて実際意味を成さないんだ。君がはいと言おうがいいえといおうが結果は変わらない。君はこの研究を認め、研究員の一人としてこれからは生きていくんだ。そう、それが俺からの報復だ。君に選ぶ権利は無い。拒めば、罪の無い人に被害が出るぞ。さあ、お前が憎む研究の一部として生きていく気分はどうだ？ああ滑稽だろ？」

ああ、もうだめだ。せめてこの手で研究を潰そう。それが当然の報いだ。そう、この身に変えて成し遂げなければならないな。

「それが、私の罪なのか？君の科学を否定し続けた私の罪なのか？・いいだろ。確かに私は丸くなった。けれども私はまだ、完全に角を失くしたわけではないぞ。」

「分かってるさ。まあやれるものならやってみればいいさ、と言っておこう。」色々あったが、彼女を三月の店に運び起きるのを待った。

「と、言うわけで、あそこにそのまま置いとくと、こっちの顔が分かっちゃうからつれてきたんだけど。」

起きたとたんに騒ぐことも無かったので、いちお話は俺抜きでほとんどスムーズに運んだ。

「まあ、本人に悪気があった訳じゃないから、勝手につれてきたのは許して欲しいんだけど。」

「つれてこられたのは別に良いんですけど、ちょっと問題が・・・」

と、基本さっきの一言以外俺はほとんど話しに入れて居ない。三月いわく、話すのが下手だから、話が速く進まないし、要点からすぐにずれるかららしい。

「問題？」

「ええっと、私が入ってた創始会ってところは、ノルンさんに心の底から助けられて、救われたから、自分の全てを捧げてノルンさんの為に戦ってるんです。」

それで、私の隊の体長が変わったときに新しいルールができてそ

の中に、敗者は切り捨てるみたいなのがでちゃって、……だから……その……そのお。」

沈黙ってどうしてこんなに長く感じるのだろうか、沈黙が続くとそう考えてしまいが、今回はその沈黙を俺が終わらせないといけないらしい。

「えーっと。えーあー、すいません。」

考えるな、誤れ。Don't think wrong
思いつきり頭を下げる。

「ああー切られたのは別に良いんです。嫌いな人もいたんで。でも、これからどうやって生活をしていけば？」

「そういうことなら……。」

「そういうことなら良い仕事紹介しようか？いちおそっていうの取り扱ってるから。」

間髪居れずに三月が入ってきてくれたおかげでこれまた当分俺の仕事はないだろう。

「私にできることって戦うことくらいですよ。」

一度戦ったから分かるけど、もし戦っていなかったら決してこの娘が、殺し屋だとは思わないだろう。

「あー丁度良い仕事があるんだけど、でも結構複雑でー。」

「なんですか？」

「まあ簡単に言うと、墨根教授の救出かな。」
「ってあれ？」

「ちよつと待てよ。それって……。」

「つるさーい。」

見事な裏拳がヒット顔をしっかりと捉えた。

「わかってる。怜火ちゃん達がさらった人の救出で、もしかしたら前の仕事仲間の人たちと闘うかもしれないってことも十分に分かってる。だから、前の仕事にしっかりとけじめをつけるチャンスとして……どう？」

また、沈黙だ。ああ長い、なんか第3者になってる俺にとってこん

だけ長いなら、話の中心となってる二人にとってはもつともつと長いだろう。

「いいです。やります。色々とお礼とかいわなきゃ言わないといけない人も多々いますし。是非ともやります。やらしてください。」泥沼に自分から足突っ込んだか。はあー、救出依頼は俺にもしていたからきつと二人でやるのかな。まあ俺のせいでもあるから最後まで付き合うか。

「あー詩焉は分かっているとと思うけど二人でがんばってね。怜火ちゃん、事後確認で悪いんだけどこいつと一緒にやっても良い？」

「もちろんです。詩焉さんとはさつき戦ったんで十分強さは分かっています。むしろありがたいです。よろしくおねがいます。あと、さつきはすいません。突然襲っちゃって。」

「いやいや、気にしなくていいよ。ここじゃいつも命が危険にさらされているしね。」

そう言っただけに俺に向かって腕を伸ばし握手を求めてきた。もちろん。

「ああよろしく。」

どうしてか、横から三月の目線を痛く感じるが、再び思う、さつきあれを見ていなかったら絶対に殺し屋とは思わないだろう。どこからどう見ても可愛らしい女の子だ。

「じゃあ三月、仕事について詳しく教えてくれ。」

「はいはい。まずは、こっちの資料から目を通してね。」

おおよその事は、資料を読んで分かったんだが引っかかることが少々あった。

「なあ、この敵勢力未知数は分かるんだけど、居場所が記されていないのはどうしてだ？」

「ああそれは、急に変わったからなんけど、新しい情報がまだ届かないの。たぶん重要な人しか知らないから分からないんだと思うけ

ど、時間さえあればなあ。」

「それにしても、三月さんって凄いですね。こんなにもいろんな事調べられるなんて。」

「ああそれは、私を拾って育ててくれた人に言っで。私はその人から情報網を受け継いだだけだから。」

どこか寂しそうに三月が話した。

俺はその理由を知っている。けれど、今は言うべき時じゃないな。なんか三月が悲しい目をするのは見たくないし。

「俺も三月もこの島に捨てられてたのを拾われて育てられたんだけど、怜火はどうしてこんな所に？」

「私もそんな感じです。私達みたいなのは、大体ろくでもない親のせいでこんなめにあったるんですよ。あ！すいません。話それちゃいましたね。」

今の話の時、怜火も少しだけだけ悲しい目をしていたんだと思う。

自分では分かってる、受け止めている、もうあきらめてるとかおもっても、やっぱり過去を見るのは悲しいんだと思う。

「ああいいよ。いいよ。あと、この違法薬品使用の可能性ってのは？」

「それはーえーつとね。なんでも、人体強化の薬で、とにかくヤバイと思ってくれば良いから。くれぐれも使用した相手とは戦わないでね。」

ふーん。と、簡単にまとめたが、要するにヤクやってて痛みとか感じないハイな状態になつてると思っていれば良いか。

「それについては、怜火は何か知ってない？」

「いや、隊長とかが話していたのは知ってるんですけど、流石にどういうものかまでは分かりませんね。もしものためにつて数人に渡していましたが、私は貰ってませんね。嫌われてましたから。」

なんか今からやること考えると、目がなかなかマジですね。

「とにかく、他の同業者いる可能性は低いんだな？」

「そうよ。だから手助けとか共闘はほとんど無いとおもってね。まあ邪魔もされないでしょうけどね。あの事故自体がほとんど完璧に情報を抑えたまま行われてるから、まだネットにもほとんど上がってないわ。まあだから今回の事件を無事に終わらせれば、私の網が広がるのよ。」

「結局は自分のためかい。」

「ついでよ、ついで。れーちゃんのけじめとあんたの生活のためなんだからね。あと、これからはれーちゃんで。」

一瞬目を大きくして驚くと、

「あ！ありがとうございます。三月さん」

「別にお礼言われるようなことじゃないんだけど、それに私の事はさんつけなくても良いのに。」

「いやいやこれだけは譲れません。」

二人とも仲良くなつてよかったなあー。つと、なんか遠くから見ていた。

「詩焉さんは詩焉さんでいいですか？」

「俺もさんとかつけなくて良いんだけど、譲れないのならそれでいいや。」

「れーちゃん、コイツにさんはもつたいない。」

これから、戦いに行く前の一瞬、その一番つらい一瞬が笑いで埋まればそれほどうれしいことはない。「閉じる」

街の奥のさらに奥、入り組んだ道や建物をうまく抜けると、一軒の店がある。ここを見た人は必ず、よくこんな所に店を作れたとか出ると思うだろう。そんな知る人しか来ないようなところに、詩焉と怜火は立ち止まっていた。

「ここ……ですか？」

「ここだよ。」

さらに、ここに来た人はこんな場所などや、こんなスペースに店を作ったことよりもその外装に気を取られるだろう。

そこには、ぬいぐるみや、女性物を扱うような外装の店があった。

そう、実にこの店はこの場所には不釣り合いなものであった。

「武器．．．買うんですよね？」

「武器買うんだよ。」

俺達がここに来た理由は、今回の作戦に使うゴム弾や催涙弾を買うためだ。一人分しか用意い出来ていない俺は、三月から必要経費として怜火の分の銃器を買いに来た。

「もう一度言つとくけど、もう実弾は使えないから。この島で、個人で殺しをすると生きていけないからね。集団ならその集団全体で見られるから良いんだけど、個人じゃあ島の力に逆らえないから。」

「それはいいんですけど、ここに本当にあるんですか？」

「ああ．．．見た目はこんなんだけど、品揃えは良いし腕も確かだよ。」

ドアに手をかけ店に入ろうとしたその瞬間正面から行き成り腹部に激痛が走った。

「ぐあー！」

「こつちからは、はいなつてんだろうがよお。お前見たいな不釣り合いな奴は裏口回れつてんだろ。」

「分かった。分かりましたってラヴィさん。だからどいて。」

長い金髪を後ろで結び、青い瞳を持ち、日本人とアメリカ人のハーフ有性生殖により整った顔をしていて格好はいかにも大胆でチャラかった。俺から見ればあんたもこの見せの雰囲気合ってないよ。

「あら？見ない子。こんな人間失格2、3歩手前にいるような奴と一緒にいたらダメだよ。君かわいいんだからさ、うちで働かない？」

「えあああ、あの．．．えーっど？」

「ラヴィさん、そんなことより適当にこの子見繕って。」

「あー、わあつたつて。ついてきな。」

店の中は本当にぬいぐるみや、女性物のキーホルダーなど小物が取り揃えられていて、感想はいかにもだった。カウンターを抜け、

地下の室に下りる階段から店のさらに奥に行くと在庫置き場じゃない別の部屋があった。

ふと、その前で立ち止まる。扉に手をかけて、押しても引いても一向に扉は開かない。

「そうだ。そうだ。忘れる所だった。合言葉決めたんだっけな。えーっと、白くて長い？」

「ウサギの耳。」

上の店内を見てみればうさぎの商品が異常に多かったことが良く分かるだろう。なんかある意味ヒント的な要素たっぷりだった。

「おーい、兎兎^{とと}ここ開けてくれ。」

中からカギが開いたような音がして、重い金属のドアがゆっくりと開いた。

「お帰り、ラヴィ。久しぶりだね詩焉。そして始めまして。ようこそラビットへ。」

ラヴィが、さっきの店に不釣合いで、こっちの店に合うなら、今出てきた、まるで人形のような少女は全くその逆で、さっきの女性物の店にぴったりで、このおびただしい数の銃器に囲まれたはやには不釣合いであった。

「こちらこそ始めまして。怜火です。」

「久しぶり兎兎。この前の銃なんだけど、スライドの調子が悪いみたいだし、標準がずれてるみたいなんだ。ちょっと見てくれ。」

「．．．乱暴に扱ったでしょ。銃は精密機械。携帯とかとおんなじだよ。ちよつと狂っただけで、標準がすぐにはずれる。あと、怜火は外にあるのから適当に見といて、詩焉も一緒に行つて、その間に見とくから。あとまた近い間に持つて来たら適当にタダ働きしてもらうから、それなりの覚悟で使いなさい。」

外に出るとさっきまでは分からなかったが、良く見るとかなりの武器が並んでいた。

「どうしたらこんなに集まるんだろうな。」

そんな素朴な質問を問いかけた時、急に殺気を感じ、一步飛びのい

たが胸倉を掴まれ壁に叩きつけられ、片方の目に何かを押し付けられた。

「確かに気になるな。それにこの島にはこんなにも銃が必要なのかと思うと、反吐がでる。だが、そんなことどうでもいい。私からも一つ質問だ。ゴム弾で人は殺せるのか？何しろ私は、実弾しか使ったことがないから分かんのだよ。なあ？」

「さあ、今までゴム弾打って死んだ奴はいなかったけどな。それよりも・・・お前は誰だ？」

はたから見ればかなりバカな質問をぶつけただろう。しかし、この少女がまといっている雰囲気はさつきとは全く違ったものだ。なんていうか地下の時に近かった。いや、それよりもはるかに禍々しかった。

つまり、怜火じゃない。

「何を言うか、私も怜火だ。まあ『私に』会うのは初めてかな。まあ似たような奴にはあっただろうが。だが、残念ながらそれは答えじゃない。」

そういつて、片目に押し当てた物をさらに強く押してきた。ああやとと分かった。それは銃だったか。どうしてそんなことに気づかなかったのだろう。なんか、感覚が『こっちの彼女』に引き付けられているようだ。

「お取り込み中わりいんだが、ドンパチやるんなら外でやってくれない。」

さつきまで、部屋の中に居たのに突然ラヴィがドアに寄りかかりながらこっちを見ていた。

「あれ？・・・私はなにを？え？詩焉さん？え？つあ？えー？どうなっちゃってるんですか？」

「いや、さつぱり。」

助けを求めるようにラヴィさんの方を見ると、目をそむけてしまった。

「こっち見な、私もなんだかわかんねえーよ。兎兎ができたつつ

たから呼びに来たらこの有様だ。怜火もその銃で良いからこつちおいで。」

手に持っている銃が妙にしっくり来るのか、何度も握りなおして、嬉しそうな顔をしていた。

「詩焉、次乱暴に扱ったら、1週間うちでタダ働きね。」

「分かってるよ。銃は大事な友達だろ？」

「そんな痛いこと言つてないよ。」

一人撃沈している間に、怜火がせっせと荷物をまとめてくれていた。

「じゃあありがとうございます。」

「おう、また来いよ。いちお、お前はうちのお得意様だからな。」

に、しても詩焉は変なのと関わっちまったな。まあかわいいし、良い子だし、銃使わせなければ良いんじゃないかね？

「兎兎飯にしよう。なにがいい？」

太陽は真上に昇り昼時を指していた。再びぶっパーにて。

ノートパソコンのディスプレイには、大空製薬本社の設計図が映し出されていた。隣には、紙の設計図が放り出されていたり、さまざまな書類が散らかっていた。

奥には三月がしきりに電話をかけていた。

「ええ、・・・はい。・・・では、あとはこちらでやらせていただきます。・・・はい、ありがとうございます。」

声に気持ちが入って無い、色の無い声で、電話を終わらせるところに戻ってきた。

「さすが、大人の対応。」

茶化すように、買い物から帰ってきた俺は三月に話しかけた。

「相手に感情を読み取られれば、それが弱みに繋がるものよ。特に商売相手ならなおさらね。」

「で、どうだった？」

そう言うと、手前のパソコンを操作したり、散らかった書類を綺麗にまとめてこちらによこした。

「赤く塗ってある通路があるでしょ？そこは掃除中の看板立てて社員が一定時間通れないようにするから、その道だけを通って。」

「場所は分かったのか？」

ペンで、青い丸で囲まれた11階にある部屋を複数指した。

「ごめん、特定が出来なかった。」

三月の情報網は、そこらへんの情報やよりも確かだし広いことは、他の仕事の時に思い知らされたので、それでダメなら他ならもつとだめなのだろう。本人は、依頼したなら完璧に仕上げて、安全な仕事にしたいと思っているが、正直十分である。

「これだけ調べ上げられれば十分だ。それに今回は俺だけじゃない。怜火もいるから成功率は大分上がるだろ。そろそろ信じてくれよ。」

「なんとしても、詩焉さんを守り通します。」

そこまで宣言されると、いや、女の子に守られるのはちょっと抵抗が、というより男としてのプライドが。

「創始会がいるかどうかも確認できなかったから、とにかく気をつけてね。じゃあ詳しい作戦を説明するね。午前2時半から2時50分までの短時間の作戦で、一気に終わらせます。まず、2時半までに、大空製薬の裏口から入って描いてあるように赤い線の通路を通って。11階に付いたら連絡してね。そうしたら、会社をハッキングする。電子ロックが全部3時までは効果がなくなるから、青で囲んである部屋を片っ端から探して。見つかったら、裏口に止めてある0305の白いバンに乗ってそのまま、請け合い人のところまで言って。あと合言葉は『うさぎのみみ』。」

嫌な予感がした。時間を少しさかのぼったあの店、ラビットを思い出してしまった。

「まさか？」

怜火と自然と目が合ってしまった。これってあれだよな？怜火がそう問いかけてきた。

「お馴染みのラビットに頼んだわよ。」

「なんでだ。なんであいつらなんだ？」

「結構あんたの知らない所で、お世話になってたり、お世話したりしてるのよ。腕はアンタだって認めてるし断る理由は無いじゃない。」

「俺だってあの人たちが嫌いってわけじゃない。正直好きなほうだし、良い人だ。だからこそ、あへて危険なところで合うのは気が引けた。」

「あんたが思ってるよりあの人たちは強いわよ。ただ、武器売ったり作ったりしてるだけじゃないのよ。・・・もう、時間だから。二人とも気をつけてね。」

三月の言動が明らかに変と思ったのは、俺だけだろうか。作戦を簡単に説明している時、公私が混同したり、話を中途半端にきいたのは、正直怖いからであろうか？完璧に整えられなかった情報、知り合いたちを、命の危険にあわせてしまうのが、プレッシャーとなっているのであるうか？今までも多少の危険がある以来はあったけど、ここまでは不安要素が多いものはなかった。だから？

「とにかく、行ってくるよ。そういえば、俺まだあのときの給料貰ってないからね。」

「私も頑張ってくるんで、どうかそんなに怖い顔しないで下さい。」

そう言っつて、怜火に続いて部屋を出ようとすると、三月に呼び止められた。

「れーちゃんについて調べたんだけど、気をつけてね。詳しく言うてる時間は無いけど・・・。」

「大丈夫。2回ほど心当たりがあるから。」

そう。っと言っつて三月は、店に戻ってしまった。『気をつけて』と聞こえたのは気のせいであろうか。それを確かめるすべは無いが、気のせいではないと不思議に自分で納得して、大空製薬へ向かった。おかしい、おかしすぎる。どうしてだれもいない？

停電を起し、自家発電に切り替わった時に、三月が電子ロックをす

べて向こうにしてくれたおかげで、順調に部屋を探すことができ、既に半分以上の部屋を探すことが出来た。

「そっちは？」

二手に分かれて探している怜火の方へと、思いっきり叫んでも怜火以外何の反応も無い。

「い、いました。け、けど。」

会社の構造は大体は、どこも同じなので怜火のいるところへは、間違わずとも簡単に行くことが出来た。

「どう、どうし……で。」

部屋の中を見ると、血溜まりの中に墨奈さんが、座り込んでいた。

「だ、大丈夫ですか？」

近くによって見ればそれが、墨奈さんの血ではないことが分かりどうにか安心できた。

「き、君は？」

「バイトが給料貰いに来たんです。」

すぐに立ち上がり、周りの血を見回していると、怜火が呆然と広い部屋の奥を凝視しているのが見えた。その目線を追うと、部屋の隅には10人に満たないほどの人だったものが転がっていた。

「あれは？」

残念ながら特に驚きもしないのが、この島で長年住んできた住民の特権のようなものだろう。しかし、元々外の住民だった墨奈さんにはこの世の光景ではない地獄の様らしい。

「墨奈さん。なにか分かりますか？」

「君と同じで私が雇った清掃員だ。彼が、ここにその全員を運んできたんだ。正直一人でこの人数を殺ったと思うとぞっとしたさ。」

あそこから抜け出した人が他にも居たのか。なにわともあれ、敵が減ったのはありがたいことだ。

「怜火、早く行かないと……。どうした？」

この島育ちの怜火がなぜか、いまだに驚いていた。確かに、住んで

いる人全てがこうというわけではないのだが、怜火は見慣れているはずなのにな。

「詩焉さん。全員ではないですけど、けど、この人たちはこんなにも簡単に死ぬような人ではないんです。もっと強いはずなんです。」

彼女にとつては死を覚悟したような勝負をするはずだったのだ。その相手がこんなにも殺されていれば取り乱すものであろう。

ともかく今は敵が来る前にここから出ないと、あれが見つかったらしゃれにならない。

「怜火いまはとにかく外に出ないと。墨奈さん来て下さい。」

「今はまだ出来ない。あの薬を私の手で葬り去らないと、この島のためにも。そうでないと、さらに被害者が出てしまう。」

「そうなれば、上が黙ってないでしょう。だから今は来て下さい。その薬がそんなに危ないなら、東でも北でも西にでも通報すれば良いでしょう。」

埒が明かない墨奈さんを無理やり引っぱり、廊下へ連れ出し、指定され通路を通り階段へ向かおうとすると、目の前の壁が砕けた。

「動くな。」

「怜火、墨奈さんを。」

そう言つて、二人を階段へ送ると、再び銃弾とゴム弾の勝負にならない勝負が始まった。

「お前か？隊員を殺したのは。ノルン様のための仕事での戦死なら救われると言うのに。」

相手の罵声や銃弾の音を耳から省き、足音だけに集中する。・・・5人。だいたい3人がさつきから俺に向かって撃ってくるバカで、きつと挟み込むように左右の廊下に展開しているのが糞つたれ2人。

お決まりの方法しかないだろう。リュックからフラッシュグレネードと催涙弾を、そっちに向かって思いっきり投げる。煙から逃れて隙だらけで出てきた一人にゴム弾を適当にうち気絶させると、さら

にスタングレネードと催涙弾を投げて、階段を下りた。

大分おいていかれたな。2階まで、急いで下がってもまだ、姿が見えなかった。

「あと少しだし、ちょっと休憩。」

そういつて立ち止まると再び目の前の壁が砕けた。ちくしょうまたか。

「やはり、銃は私に合わんな。」

白衣の若い男性が銃を投げ捨てこちらに歩いてきた。

「あんたは？」

「別に良いだろう。私はただ墨奈を返して欲しいだけだ。」

「残念。こちらもある等と同様に色々あるんで、その話は聞けませんがね。またの機会にでもどうぞ。」

白衣の男が一步踏み込み、拳を放ってくる。見た目に寄らず重い一撃だが、軽く受け流し勢いを殺して相手の顎下に向けて拳を振り上げる。

確実に入った。が、とうぜん俺も痛い。

このまま軽い脳震盪を起してぶっ倒れる。と、そう思い思いつき振り上げたのに、横蹴りが首を捕らえに来た。間一髪のところで飛び込んで避けると、そこから顔面に向かって正面から蹴り上げてきた。避けることができなかったので、ガードしたまま階段の反対側へと飛ばされてしまった。

防いだ腕が、変にしびれた。ひびはぎりぎり入っていない程度だろう。しかし、痺れて左腕はもう使い物にならない。

「んー、君は威力を殺すのがうまいな。いくら殴っても蹴ってもその感触が全く無い。気持ち悪いものだ。」

勝利を確信したか、ゆっくりと歩み寄ってくる奴を無視して出来るだけ逃げ道を探すことに専念した。

再び恐ろしい威力の蹴りが放たれた。転がって横に逃げるとさっきまで居た場所の後ろの壁がへこんでいた。

「おいおい。耐震強度とか色々偽装してんですか？」

「残念だが、この会社は震度7強が来ても、何一つ壊れはしないよ。まあいい墨奈がどうせ言うていただろう、薬をどうにかしないと、まさしくその薬がこれだ。詳しい説明は、いらないだろう。」

「どういう意味だ。」

そういつて体を示した。

これは、無理だ。靴に何か仕掛けてるか知らないが、薬で痛みがないのか、それとも、本人が本当にあそこまで強くなったのかはもういい。今はもう手加減できないな。今の一発で、初めのとくと立ち居地が逆になったと同時に、距離が稼げたので、拳で来る敵には拳で挑むようなことはやめて、奴が捨てた銃を拾い2発つつ連射した。

窓ガラスを狙うと、明かりをたくさん取り込むための大きな窓ガラスは、粉々に碎けて下に飛び散った。

「無理な勝負はしなし。ということ、さようならだ。」

2階の高さなら、それほどの被害は出ないだろう。硝煙がまだ消えかけた銃を握ったまま、窓から思いつきり跳んだ。

「逃げられはせんよ。」

止められるのに、止めずに俺を通らせたそいつは、横切った際に一言分かったことを二度言うように、面倒くさそうに言った。

残念。下にはうさぎさんが、待つてくれているんでね。

白いバンの上にそのまま思いつきり飛び降りた。車体が少しへこんだようだが、そんな事気にしない。

「詩焉てめえふざけんじゃねえぞ。」

結構マジで切れてるかもしれないほど怒っているラヴィさんの声が響いた。

「後で、弁償しますから。今は速く出して。」

すぐに、車に乗り込むと刺さるような視線が兎兎から向けられた。

「わあった、わあったよ。そう騒ぎなさんな。捕まってな。お客さんが来たぜ。」

思いつきりアクセルを踏み込むと車体が上がりそんな勢いで車が走

り出した。

表の広い車道を通り下手して通報されたらしゃれにならないから、裏の方の道を車は走る。

「敵さんは3台かぁ。」

道路は、車2台が通れるような広さのある道路なので、相手がこちらに寄せようと必死にすの隙を狙ってくる。

「撃たれてますよ。」

怜火が地獄でも見ているかのように、叫んだ。

「任せときな。この車は伊達じゃない。ってな、装甲板取り付けてあるから貫通弾でもない限り大丈夫だ。それにガラスは、防弾ガラス。ってなことで、兎兎一発お見舞いしてやんな。」

「あいあいさーきゃぷてん。」

普通に車の窓を開けるような動作で、改造してある後ろのガラスが下にスライドした。兎兎が元々車の中にあった、対物ライフルを持ち出し、後ろの車を狙った。

「てめえら、耳い塞ぎな。」

ラヴィさんが、注意するのより早く兎兎がライフルをぶっ放した。

後ろの席で墨奈さんが、耳を塞ぐのを遅らせたのか苦悩の表情を浮かべていた。

「撃つの早!!」

そんな、文句を言っても実際撃たれた1台はエンジンを撃たれたのか煙を上げて壁にのめりこんでいた。死者は出ていないだろう。まったく、器用に撃ちやがる。

「兎兎やつぱそれはだめだ。次からやめとこ。運転してると耳が・
・・・。」

ミラー越しに分かるが、当然運転に両手を使っているのでラヴィさんも苦痛の顔を浮かべていた。

「ラヴィさん。俺達が引き寄せる。行こう怜火。」

そう言って速度を少し落としてくれた車から飛び降りると、路地に向かって走り出した。

さっき見たが、たしかに白衣の男が座っていた。だとすると、創視会から何人が引き連れて、必ずこっちを追ってくるはずだ。

「待ってくれ。私も連れて行ってくれ。」

3人目が車から降りると走って付いてきた。

「墨奈さん、早く来て下さい。」

怜火が手を取りせかしながら後を追ってきた。

さっき頭の中で立てた作戦が総崩れした。

「無理だな。墨奈さん、このまま走って突き当たりを左に行くとばぶっパーって店がある。そこに行けば助けてくれる。ここは俺らが止めるから、行ってくれ。」

流石に、あのおっさんをつれて走っていたら追いつかれてしまう。

なら、先に行かせて後から自分達は逃げた方がいい。

「止めますか。」

「止めましょう。」

「最終的には逃げると言うことで。」

「そうことで。」

武器を構え、前を見ると、さっき俺に撃ってきた隊長らしき人物と、白衣の男が出てきた。

「ここまで追ってくるとはよっぽどのもの好きだね。」

「まさか、君を追ってきたとも思っているのか？それなら自分の価値を買いかぶりすぎだ。私は墨奈とそっちの女を追ってきたんだ。」

驚いて怜火の方を見ると、彼女も身に覚えの無いように驚いていた。

「なんで、お前に怜火が追われなきゃいけないんだ？どっちかって言うとそのちのおっさんのほうだろ。」

そう言った時、足元の地面に銃弾によって砕け散っていた。それと同時に、俺達はお互い反対の方向へ跳んだ。

「では、そっちの面汚しは頼みます。」

銃を撃ちながら俺のほうに走ってきてので、怜火とは一時はなれる

はめになっちゃった。

安定しない状況から撃った弾なんて恐れるに足りないので、警棒を抜いて一気に相手の懐へ飛び込んだ。

「言っておきますけど、俺は殺してはいませんよ。」

「嘘が通せるとでも？」「やられたら、やり返すのが大人のマナーだろ？」

もたれかかった男に銃を向けている男はそう言った。

そんなマナー聞いたことがありませんけど。

「別に仲間がどうかこうとかじゃないんだ。一緒に居た奴等が死のうと、俺には関係ないんだ。けどな、無駄な殺生つてのは気が良くないんだ。」

抵抗する力の残っていないのか、壁に力なくもたれかかった男は何も言い返せずにただそこに座っているだけだった。生きているのかも分からない状態で、男は話を続ける。

「それにしても、仲間について話せば助けてやるって言ってるのに、口が堅いね。」

そうして、指に力を入れると目の前の命はいとも簡単に散ったのであった。

「あーあもつたいない。・・・まあそっちのお前も隠れてないで出てこいよ。どうせ遅かれ早かれ死ぬんだからさ。なあさっさと出てこいよ。」

部屋の外から、この世の地獄にいるような形の形相で突っ込んで来た男は、連射しているのにも関わらず、一発も当らずただ一発の銃声で沈んだ。

「普通よあ。片手づつで安定してないのに、走りながら撃つてくるようなバカするか？どんな素人だよ。なあおっさん、そう言えばまだバイト代貰ってないよな。」

硝煙がまだ消えていない銃を腰に差し戻すと、部屋の中心にへたり込んでいる墨奈へと話しかけた。

「君は？」

「今日雇ったバイトの雨宮時雨あめみやしぐれですよ。お忘れなく。」

偶然にも、詩焉といったことは全く同じであったことを知るのはこの男しか居ないだろう。

「ああ、あと俺は貴方の救出依頼なんてされていないんで、逃げるなら他当ってください。たしか、他にも来るらしいですから。」

そう言っと、部屋の隅に殺した人たちを運び、装備品の拳銃や手榴弾、防弾チョッキなどをはがし始めた。

「嫌な仕事だ。こんなこととして金稼ぐなんて世の中どれだけ腐ってるんだかな。その銃拾ってください。」

一通り装備品を剥ぎ取ると、男は墨奈や奥の死体には目もくれずに出て行ってしまった。

まるで、普通の仕事を普通に終わらせたような顔をして。

携帯からある番号へかけると、さっきまで止まっていた監視カメラが動き始めた。

「ご苦労さん。いや、こちらからは何も分からなかった。ああ？どうせそっちでは調べついたんだろ？こっちは適当に拾ってるよ。素人にしては良いもん持ってるんだからしかたねえだろがよ。」

「ウエスト隊長丁度良い。どうせ私達の目的は同じだ。私も連れて行け。墨奈とあの女を取り返す。」

「それは良いですが、怜火はどうしてでしょうか？」

駐車場に近づくにつれて、残り少なくなつた仲間がだんだんと集まってきた。

「あの顔も含めて全部を私が作ったものだからな。よっぽどの事が無い限りくずれはしないさ。まさか生きているとは、思いもしなか

ったがな。やはり廃棄する時は、しっかりと確認しておくべきだったか。」

説明しているのか独り言なのか分からないまま車に乗り込むと、急いで出て行った白いバンを追い始める。

裏道の中でもさらに狭い車一台がギリギリのような道は、あえて通らせないように、3台の車で巧みに追い込む。

「対物ライフルか。来るぞ。射線上から外れる。」

運良くも、ウエストの乗っている方は、狙われずに他の車が狙われてしまった。

「始まる前にだいぶ戦力を削がれてしまったな。どうするんだ？」
ライフルがしまわれたことを確認すると、追いかけてここが始まった。

「2人が降りた、いや墨奈もだ。降りるぞ、隊長付いて来い。」
そうして、路地での戦いが始まったのだ。

「非日常」

冷火からから聞いていたのと、実際に戦ったのを比べて見ると良く分かった。

こいつは限りなく素人だ。ナイフを大振りした時点で良く分かった。普通ナイフは小さく、小ぶりに振ってフットワークなどを使い、多彩な技を繰り出して刺すものである。それなのにこいつは、行き成りの大振りで刺すのではなく切りかかってきて、拳句の果てに警棒をナイフでのガードではなく、避けて距離をとってしまった。相手の懐に入り込むはずのナイフなのに、これではナイフを使う意味が無い。

結局、与えられた装備品と仲間頼る一人では何も出来ない情けない奴だ。

「そろそろ、通してくれませんか？」

拳銃を叩き落とし、遠くへ蹴り飛ばし相手の装備品がナイフだけだということを確認すると、少し距離を取る。正直拳銃を叩き落してからまだ3分も経っていないだろう。組み手というものは思っているよりも、体感時間がとてつもなく長い。

「息だつて上がってるじゃないですか。」

そう言うと、最後の追い込みに出た。同じように大振りできたナイフを持つ手首を、打ち払うと殴りかかってきた手首を持ちそのまま背負い投げにして、相手を静める。

「俺は殺しはしませんよ。してませんし。これからもしないつもりです。」

そのまま、腕に膝を置き馬乗りになり、顎下に銃口を向ける。

年上の大人が苦い顔をしながら、必死に抵抗する姿には何か思う所があるが、そんなこといちいち気にしてられない。

「では。」

そう言つて、トリガーに力を込める。

顎下をしつかりとらえたゴム弾は、相手を脳震盪に陥らせそのまま深い眠りへとけり落とした。

もしもの可能性を考え、転がった拳銃からマガジンを抜き取り、ナイフを高低差がある街の一角に落とした。

怜火が向かった方向へ急ぐと、ここにもまたこの場に似合わないピツシリとしたスーツに身を包んだ、いかにもキャリアウーマン風の女性が立っていた。

別にどうと言うことは無い。そこに、スーツ姿の女性が立っているだけだ。何も心配するようなことは無い。横を通ろうとすると、今日は何かと神経を尖らせていたので、その女性の微妙な感じを捉えることが出来た。

急に視界から消えたと思うと、危機を感じて首を守ろうと左手を出す、信じられない痛みが右手を襲った。

「利根様のところに行かせる訳にはいけないのです。どうか墨奈様の居場所をすぐに教えていただき、このまま立ち去ってください。」

一気にバックステップで距離を取ると、痛んだ左腕を見た。さっきの、白衣の男の時のような痛みが、左手を襲い、立て続けに重ねられた痛みによりついに左腕の感覚がなくなってしまった。

無理だ。今日はそればかりだが、しかたがない。

背負ったリュックからは、もう道具を出す時間すらないので、コートの中に隠してあるものでまかなうしかない。そう決めて、リュックを相手に向けて思いっきり投げると怜火の向かった方向に、全力疾走した。

「悪いけど、無理な話だ。」

追ってこない相手に、一安心しゆつくりとあたりを見渡しながら怜火を再び探し始める。

走り回っていると、開けた駐車場へでた。

そこには、倒れている怜火の首を絞めているという光景が広がっていた。

「怜火」

相手にわざわざ自分の存在を知らせてしまうことを、後悔しつつも無視しその場で思いつき叫び、こっちに注目を集めて、首を掴んでいる手の力を緩めようとした。

こちらを見て、手を離さないことを確認すると、ホルスターから拳銃を抜き、相手へと構えた。

「離れる。」

そう言ったことを軽く無視する。これは危ないと思い、構えたトリガーに力を込めようとすると、上から何かに押し倒されてそのままうつぶせに押さえ込まれてしまう。

「九朔くん。できたらここに来る前に、そいつを止めて欲しかったんだがな。」

首を上に戻すとさっきのスーツ姿の女性が、上に乗る手を後ろに引っ張り地面に思いつき押さえつけていた。

となりの隣接している廃墟の2階あたりから飛び降りてきたのか。

「すいません。眼鏡を落としてしまい、探しているうちに逃がしてしまいました。」

「これが終わったら墨奈だ。このまま通報されてはまずいことになる。せめて製造を始めるまで待つてもらわないとな。」

これ、これだと？人を殺すことを簡単な作業のように言っ

「ふざけるな。人の命を奪うことになんも感じねえのかよ。そこにいるのは、ただの女の子だろが。」

今更思う。さっき叫ばないでさっさと撃てばよかった。止まってる敵に銃弾をはずすことなんてないのに。

まったく、一時の感情に任せて変な行動しなければ良かった。

それに、なんて奇麗事を叫んだんだろう。この島でなら人が死んで当たり前なのに。

なのにな、困ったら奇麗事に頼るのか。情けないったらありやしない。

「奇麗事だな。こんなところでは何を言っても無駄だろう。」

その通り。

そして、再度首に手をかけようとすると、銃声が轟いた。

回らない首を無理やり回してその方向を見てみると、墨奈さんが散弾銃を構えながら立っていた。

持ちなれていないのか、その姿にはやや違和感を覚えるが今はそんなことはどうでも良い。

どうしてもどつてきたんだ。

「利根、その手を離すんだ。私達の研究のことは既に、北の方へ連絡をした。私と一緒に罪を償おう。」

もう、首を絞めることはどうでもいいのか、その場に立ち上がると、墨奈の方を向いた。上に乗ってる九朔と呼ばれた人が心配そうに白衣の男、いや、利根の方を伺う。

今はそつちに気を取られていて、こちらに隙を作っているから、もう少し様子を見て抜け出そう。

「ふざけたことを、研究結果は上層部に送ったし、貪欲な社長が何何でも使う気だ。いくら、島の自治団でも、止められんよ。」

「君は、長年研究室に引きこもっていたんだろ。最近この島に来たものには分からないさ。どうしても言うのなら、私自身の手で決着をつける。」

「分かっているだろ。私には勝てんよ。」

「何事も中途半端な君相手なら、どうにかできるさ。」

墨奈が、トリガーに手をかけ、確実に狙いを絞ると、九朔の力が緩んだ。思いつきり体を回し、振り払うとそのまま怜火の盾になるような位置へと、走りこむ。

「九朔くん。今日は帰ってからメンテだな。君の場合は適合率が低いと言うことを忘れないほうが良い。それに注意不足。たまに今日みたいに、色々と失態をおかすぞ。せつかくの能力なんだ。」

「申し訳ございません。」

自分の失態を一時横に置き、そのまま利根を守るように動いた。

「それは、もう薬の範疇を超えている。まとまっていけない今の人類

が手を出してはいけないんだ。もつと先の未来。全ての人類が平等に、手を取るような時代になったらそれを使えば良いんだ。今そんなものを流したら、さらに上と下の差を酷くするだけだ。」

銃を降ろし、ポケットから小さなビンを取り出した。

「そんな先の事か。私は今の研究の方が大事なんだな。それは研究の証拠か。」

「違う。君の作った物の作用を打ち消すものだ。」

隙を狙い、墨奈を襲おうとした九朔を止める。

「はったりだ。」

「では、確かめてみるか？君が盗み出した研究結果が私の全てだとは思わないほうが良い。そういう薬があるなら、当然その逆も私は考える。」

九朔に利根が命令を下す。正直墨奈さんでは、対抗することが出来ないだろう。すでに銃の使用県外だ。

「くそ。」

銃を拾い、今にも墨奈に一撃を決めようとしている女性に向けて放つ。そして、怜火を抱き上げ、そのまま墨奈の元へと走る。

「怜火をつれて走ってください。」

「しかし、それでは君が。」

「下請け屋は、こういう役割なんです。いいから。」

怜火を預けようとすると、ぐったりとしていた体に力が戻った。

「ヒーローになり損ねたな。残念ながら私はまだ戦える。」

こんな辺鄙な島に住んでいるんだ。流石になれた。多重人格とでも言うべきか、もう一人の怜火が、目の前に居た。

「なら、そろそろ降ろしても良いかな。重いんだけど。」

突然、軽いジャブを当てられた。

「さっきも同じようなことを言ったが、私は女性だ。そういうことは気にするんだ。あと、その薬を渡せ、あいつらに叩き込む。」

いつから起きていたのか、しっかりと話を聞いていた。

「じゃあ、さっき言った通りに、今度はしっかりと逃げてください。」

いですね。」

小型の注射器に入った薬と銃弾用の薬を1つずつ互いに渡された。
「卑怯なことだが、行かせてもらう。私が居ては足を引っ張るようだからね。北のほうの自治団を呼んでくるよ。もう、話をつけてあるから。」

そう言つて、申し訳なさそうにその場から走り去る。

「では、では、お待たせしました。」

挑発的に話しかける。相手は既に、決着が付いたような顔をして、目の前に出てきた物を障害物としてすら見ていなかった。

「30秒だ。九朔君。君は失敗作を。」

「わかりました。」

そして、再び戦場は燃え上がった。

張り切つて、メンチきつたものの勝負はテンションで決まるような簡単なものではない。

いくら張り切ろうとも、体からにじみ出る疲労感は隠しきれない。

「どうした。威勢だけか？足が動いてないぞ。」

銃弾を平気で避けるようなやつでは、残りが無いので下手に撃つことは出来ない。

「あああああああ。」

叫んで気合を入れて、疲労感をごまかしながら必死に相手に喰らいつく。

向こうでは怜火も苦戦を強いられている。

余所見をしたせいなのか、鳩尾に一発。横に一発。

「ぐううつはあ。」

耐え切れず距離を取る。

「所詮はただの小僧だと言うことだ。弱者には何もできないと言うことが良く分かったか。」

「知ってるか？もう2分はたった。」

でまかせでも言ってみるものだ。顔が変わった。

顔から余裕と手加減の表情が消えると、取った距離を一気に縮めて

くる。

正面からやりあうことはできない。相手の拳は触った瞬間に力を受け流す。決して逆らってはいけない。相手の蹴りは、決して直に当ってはいけない。会社で威力は十分に理解した。

つまり、相手の攻撃を受けられない。

なら、避けることに専念すれば良い。ただ、ただそれだけだ。

本来ならこれぐらいの威力で攻撃してくる敵は勢いをつけて殴ってくるので、背負い投げで一発なんだが、普通のジャブがそれ並であるから、投げる技にまわせない。

「やめだ。どうせ何も変わらない。会社の方でも墨奈を止めてるだろう。なら、私がわざわざやることはない。だから、貴様等は苦しんで死ぬ。」

さっきまで勢いに任せて雑に打たれていた拳が慎重に、そして巧に技量に任せた拳になった。

避けても、さっきまでの様にそれでよしとはいかない。避けた拳から新しいこぶしが生まれて体の急所を貫きに来る。

「俺達が強いからだろ？てこずってんだろ。認めるよ。なあ。息があがってきたんじゃないの？」

こうきたら、こう避ける。そんな事を考えながら戦うのはつらい。

正直無茶苦茶に拳を放って楽になりたいが、ここは我慢する。冷静に的確に見極めないと、冷静になった敵には勝てない。

挑発して、相手の冷静さをなくそうとしても、顔色一つ変えない。

「もう、終わりだろう。」

ここに来て、力任せの横蹴りに対応できずにそのまま飛ばされてしまう。

一定のリズムで動いている時、急に違うリズムが加わってくると大概対応できない。まして、へとへとときにはなおさらだ。

口からはただ息が漏れるだけで、声にならない叫び声をあげる。

向こうでは、怜火が組み合っているが、押されているのが良く分かる。あのまま組んでいても、そのうち倒されてしまうだろう。

前からは、利根が一步一步確実に近づいてくる。横では怜火が、怜火が組み合っている。組み合っているのだ。そうか、1対1じゃないな。初めから2対2だった。今まで一人で戦っていたからそんなことにすら気づけなかった。

もう一度確認。前からは利根が止めを刺そうと近づいてくる。横では、怜火が『相手の動きを止めてくれている。』

ホルスターからワクチンらしい物が入った拳銃を取り出す。それを見ても、利根は止まらない。ただ、こちらを学習能力が無いバカだと可愛そうな目で見ている。怜火や墨奈さんから聞いている。分かっている。薬で強靱な肉体を手に入れて、銃弾すら避ける能力を持っている。そう言われて疑いを少々持ちながらも納得して、今は確信している。

銃の向きをゆっくりスライドさせ、利根から九朔へ向ける。的は動いてない。外すわけがない。そして、慣れた手つきでトリガーを引く。

「九朔君。」

叫んで呼ばれてこちらを見てももう遅い。銃弾は声よりも早く相手に届く。

銃弾の先端の短い針がしっかりと首に刺さっているのが、確認できた。これでいい。あとの防御のことを考えない投げやりな行動だが、これでいい。

一瞬でもこいつの気がそれた。

一気にこちらに止めを刺そうと首を折りに掴んできたが、もう何も抵抗できない。

ゆっくりと息が出来なくなる。苦しい。けれども、目の前に広がるのは、冷静さを失ったバカとその後ろに注射器を構える怜火の姿。終わりだ。

ゆっくりだが、力が抜ける。

苦しいのは変わらないが、死ぬほどではない。

利根の顔には、信じられないという表情が浮かんでいる。

掴んでいる手を振り払うと簡単に払うことが出来た。

「助かった。ありがとう。」

「そちらこそ。コンビネーションだな。まあ気づくのが少々遅かったな。私達はチームだ。これからは覚えといてもらおうか。」

「わかったよ。結果オーライだ。」

そして、利根の方を見る。しきりに手を握ったり、体中を見回している。

「お前が撃ってくれたとき分かったんだが、あの薬は効いてるらしいらしいぞ。急に力が人並みになった。」

立ち上がり、やつに近づく。

胸倉を掴み、一発思いつき殴る。そして拘束しようと、今となつては十分脅威となる銃を構えながら近づく。

「いつそ殺しとけ。きつと私はまた同じようなことをするぞ。」

「俺は殺しはしないんだ。」

それを聞いて狂ったように笑い始めた。

「こいつはいい。こんな所にいて、殺すことが怖いのか？殺す勇気が無いのか？」

もう一度胸倉を掴んで、顔を近づける。

「そうだ。俺は、殺す勇気の無い弱虫だ。けどな、それに負けない殺さない覚悟って物があるんだ。」

そう言つて、ゴム弾から麻酔銃へ持ち替えて奴に向けると、足元の地面が弾けた。

「動くな。そいつの身元はこちらが預かる。」

そちらにもまた百合の花の刺繍の入ったスーツ姿の女性がメガホンを通して叫んでいた。ただし、銃を構えた部下を数十人連れて。横には墨奈さんの姿があり、女性に必死に話しかけている。

「彼らは協力者だ。やめてくれ。」

「ここは、北の自治団が請け負っている区域だ。貴様等には何の権利も無い。・・・まったく、北側に持つてきやがって。奴ら二人を確保。おらあさっさで行けよ。」

部下が、6、6に分かれてこちらに迫ってくる。九朔は気絶させられているので、まったく動かないが、まだ、意識がある利根は逃げようもしない。

「こんな、奴等にな。なあお前達に抵抗すれば私は殺されるのか？何とか言ったらどうだ。なあ。」

ただ絶望に打ちのめされている利根は見ているのが正直つらい。生きるのをあきらめた人は、もう人と呼べない。

急に今まで普通にたっていた怜火が倒れる。それをすかさず抱きかかえる。

「おい、怜火。」

それを見た利根が一筋の光を見たような目をして話しかけてきた。

「そいつの発病も、もう近い。せいぜい楽しめば良い。」

「おい、なんだよ発病って。」

聞きに近寄ろうとすると銃のハンマーの部分で殴られ引き離されてしまう。最近は殴られてばかりだ。ちくしょう。

利根はただなされるままに拘束されて連れて行かれてしまった。

「痛っ。ちよつとあんた待てよ。最後の最後に来て良いとこ取りか？こつちは、初めから全部やってんだ。それなのに、礼の一つも言わないで、この対応か。」

とつさに、墨奈さんが止めに入る。

「やめておくんだ。自治団相手に逆らっても良いことは無い。君だつて島の住民なら分かってるだろう。」

「上層部の顔すら分かってない自治団なんて・・・」

「そこまでだ小僧それ以上は公妨とみなして一緒に連れて行く。けどなあ、捕まえた礼だ、事情聴取は見逃してやるからさっさと行け。」

「ふざけんな。」

それが覚えている限り最後の言葉だろう。気が付いたら三月の店のソファで目が覚めていた。痛い頭を抱えながら。

「非日常脱出中」

いつも通りだ。

声に乗っている感情を殺して機械になつて相手と話す。

「ご苦労様です。」

電話の話し相手にはどう伝わっているだろうか。長年・・・それほど長くはないが、出来る限り商売相手には感情を読み取られないように勤めてきた。そして、これからもだ。

「いやあ、お宅の方がほとんど終わらせてくれたみたいですし、ただの良いところ取りですよ。」

数少ない島の自治団の商売相手、お互い名前は明かさない。しかし、お互い相手のことは良く調べている。それでも、知らない振りをしてお互い話を進める。それが、お互いの立っている場所の責任であるから。

「害を与えず、と言いましたよね。」

「公妨ですよ。やむ負えない事情です。連れてくよりかは、だいぶましだとはおもいますがね。」

「まあ大した怪我ではなかったので、それはいいとします。それと、拘束した利根のその後の情報と、創始会についての情報はどうになりました？」

「わかつてますよ。それにしても、利根の研究全部私らが貰う代わりがそんだけの情報でいいんですか？他に何かたくらんでいるのは？」

「どうせ、私に取り扱っても、あなた達がとりに来るでしょう。今回は不利益な仕事だったんです。では、ファイルはいつものアドレスに送っておいてください。」

携帯を切りソファー投げ、パソコンへ向かった。

既にこちらには利根のその後の情報と創始会の情報が送られてきている。やはり、島の実権を握っている組織ほどあつて手際がすばや

い。創始会からは、怜火がいた部隊はすでに存在が消されてしまっている。

組織の名を使って好き勝手暴れた上に、武装教団となってしまうば仕方ないことだが、その後の詳細は不明。

不明？そんなはずがない。自治団ほどの情報網があれば、あんな集団調べるのはたやすいはず。

これは仕方ないので、自分の情報網を使って散策する。しかし、今からだと時間がかかる。こんなことなら、もしものために準備をしておくべきだった。

次は、利根のファイルだ。こっちは本当に細かく、そして分かりやすくまとめてあった。

内容を簡単にまとめれば、利根はしばらくの間島直轄の研究所で働くとなった。しかし、しばらくとは言っても、死ぬまでだろう。薬による力は、墨奈教授の作った対抗薬により効果はなくなった。しかし、再生された細胞は死ぬことが無かったので、若返ったままである。

まあ素直に思ったことは、利根はもう大丈夫だろう。

そんなことよりも、こいつ等はいつになったら起きるんだろうか。私の依頼のせいでこうなったのだから無理に起すわけにもいかず、正直困る。これらを運んできた墨奈教授はそのまま自宅へ帰ってしまい一人でやっていた情報の整理も終わってしまい正直暇だ。

痺れを切らし、二人が眠っているソファへ三月は足を運ぶ。足音が、誰も居ない店内に響く。そして、そっと二人の寝顔を見下ろす。

れーちゃんに比べて詩焉は顔に所々シブがはられている。だらしが無い。怜火の能力の事は送られた情報の一部に書いてあったが、それでも女の子だ。

しかし、よくやられたな。思い切って上から覗き込む。正直黙っていて、縛った長い髪を解いて、切っていれば見れない顔ではない。いや、今更だが不覚にもカッコイイと思ってしまう。

実際本人はあまり気にしてないというか、自覚していないが、確かに顔は整っているし、背も高い。

三月は自分が顔を赤めながらじっと見ているのにも気づかず、ただずっと見ていた。

どれほどの時間がたったであろうか。詩焉が、口から息を噴出すと、驚いてしりもちをついてしまう。

「ああ・・・なんでここに？」

シップの存在に気付き、顔をこするのをやめて辺りを見回す。

「どうした？」

立ち上がるのが、遅れた三月はしりもちをついたままであった。

「うるさい。」

赤くなった顔を隠しながら立ち上がり、さっきまとめた書類を思いっきり叩きつける。

そして、詩焉に続いて怜火も目を覚ます。

「あれ？みなさんおはようございます。」

「といっても夜だけだね。れーちゃん調子はどう？」

「大分楽です。普段と変わりませんね。」

二人が仲良くやっている間に、髪を縛り渡せれた書類を読む。

何も納得が出来ないまま終わってしまい、複雑な気持ちで書類に目を通す。

利根は、大丈夫だしよう。しかし、どうして創始会が詳細不明なんだ。と聞くと調べ中と、つかえられてしまった。

「詩焉さんもありがとうございます。」

「え？」

「助けてくれたんですよね？」

「ああ、俺も助けられたから。お互い様だ。」

そう言くと、怜火が手を差し伸べる。こういうのは正直恥ずかしいんだが、彼女の気持ちを裏切れないので、手を握り返す。細くて、三月とは違う繊細さがあった。

「すいません。私なんて、車から降りたらすぐにやられちゃったん

ですよ。そこから記憶がほとんど無いんですよ。」

ああ、あの状態の時の記憶はないと。そういうことですか。後ろから三月がサインを送ってくる。たぶん三月も調べたりしてあの状態のことが分かったんだろう。

「そうそう、れーちゃんもこれ読んどいてね。今回の報告書見たいののかな。」

そして、すぐに目を丸くした。きつと創始会の所を読んだんだろう。

「れーちゃん。ごめんね。そこはまだ調べきれた無くて。さっき、ラヴィさん達から連絡があつて、そっちにも自治団がいつてあつちを追いかけた方は、全部拘留されたんだって。」

「待て、隊長らしい奴は、俺が眠らせておいたけど。」

「それだけじゃあ、逃げるかもね。」

グサツ。あの時は時間がなかったとは言え、言い訳にはならない。

「悪かった。」

二人から気にしてないと気を使われても、悪いのは俺だ。

「そうそう、墨奈教授の自宅に行つて給料でも貰つてきたら？あの人忘れてたみたいだから。今月厳しいんですよ。それまでに、私の方の報酬も用意しとくから。」

二人で行つて来いとのことなので、身支度を済ませ店を出ようとする。もらった地図によると、そんなにここからは遠くないようだ。

「そういえばさ。あれからやつと24時間くらいたったよな。」

「そうね。本当に長くて疲れる一日だった。じゃ、いつてらっしゃい。」

二人ともしっかりと返事をする、目的地へ足を運ぶ。どうしてこうなったんだろう。

人生でこう思うことは良くあることだ。例えば、親しい友人と喧嘩してしまった時、会社で失敗してしまった時、他にもたくさんあるだろうが、しかし、なぜだろう？必ずこう考えるわけだが、私にはその理由が分からない。

ノルン様のために、資金を集め、障害となる人物を全て消してきたのになぜだ。なぜ私は救われないのだ。どうして私は町のゴミの中に居るのだ。私は見捨てられたのか。

いや、違う。きっとそうだ。

男は拳を握り、壁に思い切り叩きつける。まるで、自分の存在を確かめるように、認めさせるように、しかし、それが自分の立っている空間を壊すことも分からずに。

すべては、墨奈のせいである。あいつがあんな薬を作らなければ、こうはならなかった。部下も失わずにすんだ。そう、すべて奴のせいだ。

覚悟を決めて、立ち上がると、さっきひろったバッグを下げ歩き出す。ただ一人罰を受けていな者に、制裁を与えるために。装備は、M92が残り4発に、さっき拾ったバッグには手榴弾2個、スタングレネード1個。後ろから忍び寄れば銃で一発だ。

強すぎる忠誠心を持った男は崩れて、変貌し、島の存在に相応しく生まれ変わり、暗い暗い本当の闇へと消えていった。いや、落ちていった。

北区の中心からやや外れた地区にその家はあった。

見た目は平均的な2階建ての家で、普通に光熱費など、家賃を考えると、一人暮らしには広すぎるほどだ。

しかし、この島は違う。家を建てるには、金がかかるが、光熱費などはほかの国に勝手に押し付けている。正確には、近くの国からパイプを勝手に伸ばし、ガスなどを頂戴しているのである。さらに、島全体が大型の自然の発電機にしたようなものだから、電気は売る

ほどあまっているのだ。

さらに、家賃を払うのは一部の金持ちが、自分の見栄を張るためであるからして、ほとんどの家は立っていれば、ほぼ無料で無断で住むことができるし、持ち主が死んだ家も同様だ。

そこを求めて、まともな家を失った人が集まる場合も良くある。特に多いのは日本人の若者であるが。

そんな感じで、この島で家を持っていない人はほとんどない。あくまでほとんどである。常に変わっている人口を常に管理する事は流石に出来ない。

そして、墨奈の家をたずねる。

「すいませーん。詩焉ですけどー。」

インターフォン越しに相手を呼ぶ。こんな所まで給料取りに来るなんて、さすがに厚かましいだろうか。

いや、そんなことは言ってられない。今月は本当に危ないんだ。

「ああそうだ、そうだ。君に渡しそびれていたよ。」

ドタドタという音がして、複数の玄関のガギが次々に開けられる音がしてきた。

そして、ドアを開けたのは、頭が少しさびしくなった、中年の元雇い主で、今日の救出対象だ。

「すまないが、銀行まで一緒に来てくれないか？今あいにく手持ちが無くてね。」

「ああ分かりました。」

もちろんこの島にＡＴＭなんてものは無い。あつたらすぐに住民のための寄付金となるだろう。

そのため、お近くの銀行へ住民は訪れる。

銀行が歩いてせいぜい１０分程度の所にあるので、徒歩で向かう。街灯などはしっかりとあるので間隔間隔はくらいが、夜でも十分明るい道を歩くことが出来る。

歩くこと数分。

微妙な雰囲気の変化をまず始めに怜火が感じ取った。

「詩焉さん。」

「ああ」

怜火に言われて、ようやく気づく。

「その角を曲がって、墨奈さんを連れて行ってください。」

無謀なことを言われ、正直止めようとしていたが、彼女の瞳を見てしまったらそんなことは出来なくなってしまった。あの目ではない。本当の決心の目だ。

「墨奈さん。曲がったら一気に走りますよ。」

相手の返事も確認せず、曲がった瞬間手を引いて思いっきり走る。

銀行に送れば、安全は十分に確保できる。銀行がある場所は、島の安全区域に指定されているから、下手に騒ぎは起せないはず。

曲がった敵を撃つ為に、怜火は角から3歩ほど離れた所で待ち構えた。

一歩一歩近づいてくるのが、よく分かる。

呼吸を整える。深く。深く。

不意を付いて一気に仕留める。

自分の中でリズムを決める。そのリズムにしたがって、相手に拳を叩き込む。

それで、終わるはずだった。

放たれた拳は空を切り、代わりに銃が視界に飛び込んできた。とつさに、銃口を見てある程度の場所を予想して身をねじる。

続けさまに2発。

二人の姿が街灯に照らされる。

「ウイン隊長。」

「怜火か。お前になら本気でいける。そこを退けとは言わん。ここに散れ。」

銃をしまい、ナイフを構えさしてくる。

詩焉と戦った時とは、まるで動きが違った。切れのあるナイフ捌き、軽やかなフットワーク。全てが別人の動きだ。しかし、その攻撃は怜火には当らない。ナイフは腕をはじかれ、空を切る。そして、そ

ここに拳を叩き込むが、その拳をウインはしっかりと受ける。お互い一步も譲らない激しい勝負を続ける。

しかし、装備と言う点で、怜火は圧倒的に不利だった。

一歩下がり手榴弾を投げる。住宅地であるとか無いとか、今の彼には関係ない。

しかし、全てを捨ててない怜火には、今後がある。こんな所で手榴弾を使い被害を出すわけにはいかない。拾って、そこらへんに投げるわけにも行かない。一瞬の迷いのせいで、動くことが出来ずその場に固まってしまった。死を覚悟したが、爆発は起こらず、代わりにスタングレネードが投げ込まれていた。

気付くのに一瞬遅かったため、目をつぶっても薄い瞼では強烈な光を塞ぎきれなかった。

目は眩しくて開けられない。耳はキーンっとして何も聞こえない。気配だけでナイフをかわす。いつもどおりではなく、さっきまでの地形を思い出し、後ろへ思いっきり跳ぶ。

「聞こえないだろうが、お前の言葉を聞く義理も、もう無い。」
静かにナイフを構えなおし、殺りに行く。

経験だろうか、本能だろうか、一瞬で距離を縮めるような踏み込みからのナイフを寸前でかわす。

「あーったく、何にも聞こえないし、見えないか。こりゃーまいった。」

怜火のまといっている雰囲気が一瞬で変わる。

「死ぬ訳にはいかないんだ。お前が死ぬ。」

見えないはずなのに、ウインの手首を払い、ナイフを奪う。

「お前はやかましいな。動きがすぐ分かるんだよ。」

狩る立場と狩られる立場が変わった。怜火からのナイフをウインは避けきれず、だんだんと切り傷が増えていく。

「もう、おしまいにしようか。」

懷に飛び込んだ怜火から、強烈な一撃が加えられた。

3年に一度降るか降らないかのこの島に、久しぶりに雪が降ったあ

る年。

国から逃げてきたが、有り金はそこを付きかけ、仕事もせずに郎党に迷っていた。

せつかく逃げてきたと言うのに、このままではのたれ死んでしまう。頼りにしていた仲間は皆捕まってしまった。いまさら俺を探さなくても必要な情報は聞き出せただろう。

そう考えをまとめると、誘拐をする決心を決める。

簡単だ。適当に通りかかった、子供女性を狙う。できるだけ、一人で居る所を狙えばいい。

ブライドなんてこの島に来たときに、一緒に捨ててきた。

まずは、適当に人通りのない道を歩き回る。

1日かけて狙いをつけると、すぐに行動に出る。

小奇麗そうな服装で歩くその姿はまさしくカモだった。

そのの、道を曲がった瞬間だ。

最後の決心は以外にも、簡単に決まり、行動に移す。

「騒ぐな。」

麻酔を含ませたハンカチ口を塞いで、そのまま路地に連れ込む。連れ込むはずだった。

「お前がな。」

今まで後ろには誰も居なかった。しかし、そこには人が居た。背中越しに伝わってくる銃の感触のせいで、雪が降っているのに体中から汗が噴出す。

命が欲しく、手を離す。

「ご苦労様です。私は大丈夫ですから、それをしまつて下さい。」

静かに返事をして、男はまた路地へ消えていった。帰る一瞬、路地にはまだ複数の気配があることがわかった。なんて無謀なことをしたんだろう。こんなにも守られている人物を狙うなんて、勘や腕が一気に落ちたのが身にしみる。

「良く分かりましたね。黒い服を着た人はあのひとだけじゃありません。」

口からは言葉が出ず、ただあほらしく動かすだけとなってしまった。

「どうして、俺を殺さない？お前を誘拐しようとしたんだぞ？」

やつのことで、出た言葉は情けないほど震えていた。

「生活に困っているからでしょ。ならしかたありません。困っている時は、お互い手を貸しあうのです。そうです。あなた、私の元で働きませんか？」

理解できない。思考が付いていかない。俺は何処に立ってるんだろうか。もう、立っているのかすら分からないほど、今の状況が理解できない。

「決まりです。では、どういう仕事をしてもらうか、具体的に決めないといけませんね。今みたいに、良い勘を持っていらっしゃるので、護衛部隊の一員から始めてみてはどうでしょうか。ああ、それと住む所も用意しないといけないですね。それにしても、人一人養うのは、こんなにも大変なことなんです。」

そういつて汚い俺に綺麗な白い手を差し伸べてくれる。

人の前で泣くのは情けないのだが、今は関係ない。本当に久しぶりに純粹な涙が、頬を滑り落ちる。

涙を流しながら、恐る恐る手を近づける。俺なんかが触って良いのか？汚れてしまわないのか？

「怖がらなくても良いのです。誰だって怖いんです。だからお互いに協力するんです。」

彼女の手は暖かかった。体温的な暖かさではなく、もっとほかの、遠い昔に忘れてしまったような暖かさがあった。

今だってまだ何も理解できない。

けれど、一つだけ分かったような気がする。女神だ。まるで女神のような人だ。こんな島に救いは無いと思ったが、それは違った。今目の前に、女神様がいる。これから命をかけて守る人がいる。

「私の名前はノルンです。あなたは？」

「ウエストです。」

「では、ウエストさん、これからよろしくおねがいします。」

「まただ、また微妙に記憶があいまいになる。」

スタングレネードとフラッシュバンで視覚と聴覚を失った所までは確かだ、それからどうしたんだっけ？

たぶん、でたらめに戦ってそれで今は馬乗りになってナイフを押し付けてるんだ。

一瞬のうちに色々あったから、ちよつと頭が混乱しちゃったんだ。

「隊長、どうして創始会に入っただんですか？」

「不意にそんな事を聞いてしまった。そのまま止めを刺すなり、色々することがあったのに。」

「ノルン様に助けられたんだ。国を負われて、この島に来て、生きていく希望をなくして死にそうになっていた時、あの方が助けてくれたんだ。生きる希望を与えてくれたんだ。だからだ。」

「だからって、創始会の名前を汚すような汚い仕事をしなくたっていいじゃないですか。」

もう、力を入れて押し付けていないのに、ウエストは何の抵抗もしない。

「あの方は綺麗過ぎる。本当に綺麗なんだ。だから、こんな島のせいで汚れてしまっただけいけい。」

「……その為には私達が、泥をかぶらなければならないんだ。創始会の一部を任された私なら、ノルン様の手を直接汚すことなく、汚い仕事が出来る。ノルン様の障害を取り除ける。例えばそれが、ノルン様の名前を汚したとしても、邪道と言われようが、なんと言われようが、別に構わなかった。ノルン様には綺麗でいて欲しかった。」

「そんなの、自分勝手です。」

正直押し付けたナイフは首を離れ、もう意味を成さなかった。

「やりすぎてしまったかもしれないことも分かってる。それに、その為に色々と犠牲にしまったこともな。」

その目は、過去を見ていた。まるで、死ぬ前の走馬灯をスロー再生したように、ゆっくりと、ゆっくりと、過去を振り返る。

変な部隊だったが、いい人もいた。自分の身を犠牲にしてまで、任務に勤めてくれた。

遣り残したことはたくさんある。ノルン様に誤り。部下を助け出す。

死にたくないな。しかし、口からはそんな言葉は出ない。

「殺すなり、どうにでもすればいい。」

「殺しません。自治団にも受け渡しません。創始会に戻ってやり直してください。私の分まで、本当にノルン様のためになることをしてください。」

「そんなことでいいのか？ いづれ、殺しに行くぞ。」

「それでもです。私は過去の借りを清算し切れてないんで、どうか私の分まで、お願いします。」

静かにため息をつく。

「お人よしだな。早死にするぞ。」

「自分のやりたいようにやれて死ぬなら、本望です。あの、隊に居る時は、すいませんでした。良く分からないままめちゃうちゃにし

ちゃって。では。」

相手の返事を聞かないまま、気絶させる。

ポケットから携帯を出し、創始会に電話する。

場所を伝えと、そのまま携帯を壊す。

嫌な過去の鎖を一つ一つ断ち切る。まだまだ、その鎖はある。でも、あきらめない。本当の自由になるには、過去を断ち切って、自分の足で歩いていかないといけないんだ。

もう、もどれないから。もう、進まないといけないから。もう、成り行きに任せられまいから。今日は良く動かされる。

戦ったり、戦ったり、戦ったり、跳んだり、戦ったり、そして今は走っている。

怜火の元へとにかく急ごうと、足を上げる。この時間なら、人目を気にせずにかむしゃらに走れる。

と言っても、この島でそんな気配りはほとんど要らないが、安全区域となつているこの場所には、島の外の人間に近い人間が住んでいる。だから、自分との差に気を使うのだ。

来たときの倍以上の速さで戻るが、それでも3分以上はかかってしまふ。頭の中で計算をし続けるが、そんなものに意味は無い。

とにかく、怜火の安全を願って走り続けた。

ようやく、さつきまでいた景色がちらほらと視界に入ってくるようになり、ゴールに近づいたことを知らせてくれた。

その角をかがれば。

そう思い、20メートル先のゴールヘラストスパートをかけた。

「怜火。」

息を整えてから呼べば良いのに、息を切らせているので、まともな声にはならない。

そこに立っていた人影がこちらを向く。

一瞬今までのことを思い出し、身構えてしまったが、そこにいたのは普通の怜火だった。

「詩焉さん。」

足元に倒れているのは、ビルや路地であつた隊長らしき人物だろう。勝つたなら、過去を拭えたのだろうか。満足な結果が得られたのだろうか。

「スケツトはいらなかったみたいだ。」

心配してきたのに、その心配していた人物を差し置いてその場に疲れて座り込んでしまう。

「どうだった？」

無神経な質問だろう。してみた良く分かった。それでも、彼女のためにも今は聞かないといけなかった。

「少しは……まじになったと思います。けど、結局今回も他人任せです。私の分まで働けて言つて返事も聞かれないまま、気絶させちゃいましたから。」

悲しく笑いながら、凄いことを言う。

「なら、もどろうか。」

その時だけは、給料の事を考えずにいられた。その時だけは。

「何も言つてくれないんですか？普通こういう時つてアドバイスとかくれるんじゃない……。」

「俺は怜火の立場にはなれない。同じようなことを経験していないから、答えも知らない。だから、自分で満足いく答えを探してくれ以上。」

悲しんでいた目が、少しだけ戻つた。力なく笑つたが、それは何にも影響を受けていない、本当の笑みだつたんだろう。

「なんとなくです。なんとく詩焉さんが分かりました。」

「それは良かった。」

差し出された腕を取り、立ち上がる。

最後にづらい目で、振り返り覚悟を決める。

「行きましょう。」

少しずついい、だからしっかり自分の生きる道を見つけよう。そう思えば、まだ希望を持って生きていける。帰ることすら、楽しみに感じる。

そうして、彼女は自分の新しい道を探す道を見つけることにした。

エピローグ

俺にとって大きなことは、この島からしてみはほんの些細なことであつた。いや、それすら満たさないちいさな事だつた。

死に物狂いで戦つた次の日、世界は何も変わらず、いつも通りの日常がそこには広がっていた。

少しだけ変わった事と言えば、大空製薬の上層部が多少入れ替わつたことぐらいだ。島の幹部達によつて研究結果を全て持つていかれた上に会社を動かしていた上層部を持つていかれたのだ、空中分解するのは必然だろう。

それと、創始会本部は今回の件が身内の不始末のため、全てを黙認。おかげで少なからず向こうからの怒りを買わずにすんだ。

一番安心したのは怜火とは言わなくてもよしとしよう。

墨奈さんは、あの研究を知る数少ない一人なので、島から嚴重に監視されている。そのため殺害はほぼ不可能だろう。

研究が広がるのを防げて、過程はどうあれ結局はよかったんだろう。

もちろん、自分を売つた大井製薬は退職して、今は監視されてる島の研究者として、利根との研究結果の産物、つまり薬の効力を打ち消すための薬を大量生産している。

少しでも出回つてしまつた可能性があると幹部から言われ、今の職に付いたという。なんと律儀な人だろうか。しっかりと料金を払つてくれるし。まあできたらこんな感じの人から仕事の依頼を貰いたいものだ。

そして最後に、俺もあまり変化したことは無い。

いつも通りに、金に飢えて一生懸命に働いている。

荷物を届けたり、指定人物をさらつたりと、悔しいがいつも通りだ。

あれから、久しぶりに三月の店に通っている。

格好つけて自分で仕事は取っていけないので、できるようにするまでは、しかたなく、お世話になることにした。いや、させてもらっています。

それで、いつも通り仕事終了の報告へと店に向かう。

時刻は9時を回り、街はすっかり夜の顔になっていた。

「いらつしゃーい。」

いつも通りの、見かけだけは美しい容姿とともに、店の奥から声がした。

「あ、いらつしゃいませー。」

ついでに、もうひとつ。

今までは無かった声が奥から響いた。

胸には『ぱぶっパー ウエイトレス係り 怜火』と書かれたプレートを下げ奥から出てくる。

あの後、行くところがない怜火を三月が雇ったのだ。

まあこうなるのはなんとなく分かっていた。三月なら、少しでも関わった人をそのまま不幸にするはずが無いから。

そう、ある意味、信頼のようなものを持っていた。

「様になつてきたじゃん。」

「はい、どうにか慣れてきました。」

初々しいエプロン姿で客に笑顔を振りまくその姿を見にくる客も少し入ると言う。

そのときは、三月が少しご機嫌斜めな感じになっていたが、店の利益に繋がることなのでよしとしたらしいし、何よりそんなことでイライラするようなキャラではないとのことだ。

「ほら、お客さんが呼んでるよ。」

軽く礼をして、数少ない客の下へ行く。

「報告。」

「はいはい。しっかりと判子貰ってきたよ。」

そういつて、荷物の受け取りが無事完了した確認書を渡す。

さーっと思通し、確認すると。

「ご苦勞様。これおごりよ。」

そう言つてサンドイッチを出してくれた。

「おごりねえ。」

「何よ。いらなないならいいんだけど？」

「いえいえ。」

簡単なやり取りをして、サンドイッチを口に運ぶ。

「いつもながらうまいな。」

「お粗末様。」

そう言つて、席を立つ。

「また、お越し下さい。」

店の奥から、怜火が見事な営業スマイルで送ってくれる。

「明日暇なら、仕事あるからきなさいよあ。」

皆に軽く手を振つて店を出る。

リュックからイヤホンを取り出し、お気に入りの曲を聴きながらゆつくりと我が家へと帰る。

対して変わっていない。

俺はまだこの程度だ。何も変わっていない。

けど、俺の周りは変わっていく。できたら、良いように変わっていつて欲しい。

それは、ただ、自分の周りが変わっていくことに対する恐怖であつて、自分が臆病なだけだとは、今は分かつていない。

分からないままでもいいのかもしれない。分からないままその恐怖を克服できればそれでいい。

だから今はなににも気付かずに、そのままいればいい。

だから、無尽蔵に時間が流れていけばいい。その時がくるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5328i/>

BAD WORK

2010年10月13日13時19分発行